

I. 取材の目的と意義

障害者が自立し、活躍している社会はどのようなシステムや文化を持っているのだろうか？本研究では、ミクロネシア連邦に位置するピングラップ島社会の事例をもとに、この問いについて考えていきたい。筆者がピングラップ島に着目する理由は、この島では12人に1人が「全色盲」であるため（他の国では3万人に1人）、島の中で全色盲者が比較的マジョリティとして存在し、彼らが自立するためのシステムと文化形成があることが想定されたためである。

また、この想定を支持する重要な根拠として注目しているのは、ピングラップ島において全色盲の男性たちが、「トビウオ漁に長けている」ことや、全色盲の女性たちがその視覚的な特性から、「いわゆる正常な色覚を持つ人には見えない文様が織り込まれた工芸品」を制作しているという、オリバー・サックスによる報告[サックス 1999]である。ピングラップ島ではトビウオ漁や工芸などが、全色盲者に特有の生業であり、それが彼らの自立を支えている可能性を想定できる。そこで本研究では、トビウオ漁や工芸など文化的な側面に重点を置いて調査することにより、ピングラップ島における「障害とアドバンテージ、そして自立」の実態について明らかにすることをめざしたい。

また、その実態を知ることは、以下に述べるように日本における障害者問題を相対化して捉えなおすことにもつながる。

II. 問題意識

現在の日本社会は未だバリアフリー社会とは言い難い。障害者と健常者は多くの場合分断され、別のコミュニティに分かたれながら社会生活を送っているという印象がある。そのことの良さもあるが、時にその分断が障害者にストレスを与えている現状もある（たとえば、病院の受診において、障害者配慮がなされていないことや、健常者を主体にした社会サービス構築など。特に道路・交通における安全への配慮は未だに不十分で危険でさえある）。日本はバリアフリー社会とは言えないのである。これは障害者が数のうえでマイノリティであるために、彼らの障害の特性（全色盲であれば、色覚の問題の他に、羞明と弱視を伴うことなど）が集団の中で意識化されにくく、教育や生活環境、就労のバリアフリーデザインに反映されにくいということがあるだろう。全色盲者が数としては比較的マジョリティとして存在しているピングラップ島は、全色盲者（障害者）が自立し、なおかつその特異な能力が尊重されているコミュニティ、換言するならば障害者の特性が日常の中に顕在化しながら形成されているコミュニティであると想定される。こうした社会を観察することは、日本社会における障害者と健常者の関係、障害者の自立の現状に関する我々の理解を深めることにつながる。そればかりか、今後、日本でバリアフリー社会を実現させるための具体的方策を立案する上でもきわめて有用な示唆を得ることも期待できる。

ピングラップ社会において、全色盲者（障害者）がどのような能力（ハンデ）をどのように生かし、その社会構造の中でどのような役割を担っているのかを明らかにするためには、①全色盲者のハンデキャップには何があるのか、②全色盲者がハンデキャップを生かすことができる自然環境、社会環境はどのようなものなのか、についての現地調査が必要不可欠である。しかし、先行研究ではその観点で調査されたものがなかった。そのため、今回の調査ではその部分を明確にすることを目的とした。

また、そのことが明らかになれば、「日本社会における障害者の自立や理解、バリアフリー」へのヒントにつながる可能性もあると考えた。

III. 先行研究の概要

ピングラップ島の全色盲者に関する先行研究は医学的なデータの蓄積が主体であった。医学的な全色盲の調査は1954年頃から行われている。主なものは以下の通りである[山本 1986]。

1954年 H.Eクロホード博士がこの眼病を医学雑誌に発表

1963年 三人の現地人患者がグアムの研究所に連れて行かれ、予備調査される

1969年 米国国立衛生研究所の神経病並びに脳卒中研究部門のブローディ博士と、当時ハワイ大学集団遺伝学研究所にいたハッスル女史が、初めて本格的な医学調査を行う

1970年 山本学、血液調査に入る

上述の他にも、参考文献にあげた医学論文のような形で、医学的な研究はかなり積み重ねられており、ピングラップ島の全色盲に関わる遺伝子も特定されつつある[G J Ben Simon *et al.* 2004]。

しかし一方で、彼らの文化的な背景の調査の少なさが際立つ。彼らの文化・社会的な背景についての研究は、脳神経科医のオリバー・サックスによる報告[サックス 1999]があるものの、ピングラップ島の全色盲者の織りなす文化的な側面にごく簡単に触れるにとどまっており、詳細な報告はいまだになされていない。

以上のように、従来のピングラップ島の全色盲の調査は医学的（遺伝学的）な研究が主体であった。今後は全色盲者に関する文化・社会的背景に関する研究をすすめていく必要がある。文化人類学的かつ障害社会学的にも、障害者の自立、障害をアドバンテージとして活用する社会モデルとして、我々が自らの社会を捉えなおすための有用な材料になることが期待できるからである。

IV. 方法

上記の目的を達成するためにはピングラップ島、及びポンペイ島のピングラップコミュニティにおける現地調査が不可欠である。以下にその方法を列挙し、詳細を後に説明する。

- ①全色盲の家族の家に住み込み調査（ポンペイ島のピングラップ人コミュニティにて）
- ②全色盲者とその家族、所属コミュニティの成員にインタビュー（ピングラップ島とポンペイ島にて）
- ③全色盲者にビデオカメラを渡して撮影してもらおう（ピングラップ島にて）
- ④ピングラップ島の伝統的な漁である Kahlek を題材に全色盲の人に詩を書いてもらい映像化（ピングラップ島にて）
- ⑤日本人の全色盲者と眼科医にインタビュー（現地調査前に日本にて）

上記の項目に関して記述していく。

①ピングラップ人のコミュニティが存在するポンペイ島では、全色盲の家族（政府の視覚障害者支援専門家として働く全色盲の男性の家族）とともに寝食を共にした。世帯のうち5人が全色盲者だった。日常的にリサーチへのアドバイスを受けることができた。また、常にビデオカメラを携帯し、いつでもインタビューを取れるようにした。

②ポンペイ島とピングラップ島では、全色盲者の家族と、彼らの所属するコミュニティの人々に積極的にインタビューを行い、全色盲者を取り巻く社会を多角的に捉えられるように努めた。

また、ピングラップ島だけでなくポンペイ島でも調査を行ったのは、それぞれの島での全色盲者を比較することで、ピングラップ島の文化の特殊性が際立つと考えたためである。同じピングラップ人であっても、ピングラップ島とポンペイ島のどちらに生まれたかで、また、その他 USA やグアムへの移住経験があるかで、全色盲者の生き方は大きく異なっていた。「安定した職を得ているか、あるいは得た経験があるか否か」という点に着目した理由は、社会の全色盲者に対する客観的評価を反映すると考えたためと、全色盲者自身の自己評価や、社会的責任に対する意識の高さなどを反映すると考えたためである。

インタビューは主に次の分類に基づいて行った。(1)ピングラップ島に生まれ、ピングラップ島で暮らす全色盲者、(2)ポンペイに生まれた有職のピングラップ人、(3)ポンペイに生まれた無職のピングラップ人、(4)ポンペイやピングラップから他の島や国で就労した全色盲者、など。

③全色盲者の暮らし、視点・視覚、美意識を理解するために、全色盲者自身にビデオカメラを渡し、撮影してもらった。全色盲者の中には、自分たちの視覚・色覚が「白黒」だと表現されることを嫌っている人もおり、彼らの視覚と色覚を適切に理解すること、少なくともそのための最大限の努力をすることは、彼らの調査を行う上で必要不可欠であると考えたためである。そのための手段として、彼らの撮影した映像を通して彼らの見ている景色を追体験することは非常に有用と考えた。撮影において彼らに行った指示は、「美しいもの、興味深いもの、なんでも良いので心が動くものを撮ってきてもらいたい」というものだった。結果として、島

の行事、島民の暮らし、月などの映像が集まった。

④全色盲者の感覚をより深く探究するために、島の伝統漁である Kahlek に着目して、彼らに Kahlek にまつわる思い出などを自由な形式の詩にしてもらうよう依頼した。また、Kahlek における彼らの視覚や感情、家族への思いなどの私的な内容を記述してほしいということを強調した。「詩」という形で提案したのは、文章の中で Kahlek の一般論や技術の解説に終始してしまうことを避けるためである。また、詩という形式を提案することで、彼らの中の美学や芸術的な表現力を見たかったという意図もある。美学や芸術的な表現には、彼らの特殊な視覚とそれを通じた情動などが反映され、彼らの奥深くの感情が噴出するきっかけになる可能性が高いからである。

⑤ミクロネシアに行く前に、日本人の全色盲者と眼科医にインタビューを行った。ピングラップ島の全色盲者社会の特殊性を相対化し、理解する上でも有用だと考えたためである。

ピングセラップ島の全色盲者
文化と生活の現状
(2017年)

八幡亜樹

取材期間：2017.8.2~9.23

取材地：ミクロネシア連邦

ピングセラップ島 (2017.8.7~8.30)

ポンペイ島 (2017.8.2~8.7, 8.30~9.23)

目次

I. ピンゲラップ島概要

1. ピンゲラップ島の基本情報
2. ピンゲラップ島のセクション制度
3. ピンゲラップ島の職業
4. ピンゲラップ島の宗教
5. 島の政治
6. ピンゲラップ島の言語
7. ピンゲラップ島の婚姻
8. ピンゲラップ島の食
9. ピンゲラップ島の漁①
10. ピンゲラップ島の漁② ~Kahlek~
11. ピンゲラップ島の禁忌
12. ピンゲラップ島の医療
13. 日本時代の面影

II. ピンゲラップ島の全色盲

1. 概要
2. 教育
3. ピンゲラップ島の全色盲者の不利なこと
4. 羞明対策
5. 全色盲者と Kahlek
6. 男たちと漁
7. 女性と weaving
8. 全色盲のコミュニティー
9. 差別や偏見
10. 生活における工夫
11. 全色盲の原因に関する全色盲者の自覚について
12. K 青年の夢
13. 総括

- III. ポンペイ島の全色盲（その他 USA など、島外に移住した全色盲）
 - 1. R 氏；政府教育部門 special education program, specialist について
 - 1-1. R 氏の功績
 - 1-2. R 氏の家
 - 2. 全色盲児童の様子
 - 2-1. Mand のエレメンタリースクールの様子
 - 2-2. コロニアのハイスクールにおける生徒の様子
 - 3. ポンペイ島における全色盲者の就労状況
 - 4. 全色盲児童の教育に必要な物品
 - 5. ポンペイで生まれ、ポンペイで働く全色盲の人のインタビュー
 - 6. ピンゲラップで生まれ、ポンペイで働く人のインタビュー
 - 7. ピンゲラップ島から USA に移住した人
 - 8. ピンゲラップ島から出てきてポンペイ島で無職な人
 - 9. ポンペイ島のピンゲラップコミュニティーに生まれて無職な人のインタビュー
 - 10. USA に出て行ったピンゲラップの人の暮らし
 - 11. 一般の人に聞いてみた
- IV. 総括；ピンゲラップ島とポンペイ島の全色盲者比較
- V. 参考文献
- VI. 後記

I ピンゲラップ島の概要

1. ピンゲラップ島の基本情報

[表1] ピンゲラップ島の概要

国家	ミクロネシア連邦 ポンペイ州
位置	6° 13' 5" N 160° 42' 10" E ピンゲラップ環礁上に位置 (ピンゲラップ環礁はピンゲラップ島の他に、小さな Sukoru と中 くらいのサイズの Daekae という島から成る)
面積	1.8km ²
人口	167 人 (2017 年 8 月時点) ※1990 年には 1000 人を超えていた。
宗教	キリスト教 (プロテスタント) 讃美歌はポンペイ語とピンゲラップ語
言語	ピンゲラップ語
生業	漁業、織物 (しかし身内間での売り買いがほとんどで、漁業に関しても、主は自分が 食べるためという状況)
その 他の 島の 職業	ポリス。郵便局員。ヘルスアシスタント。電気修理屋。学校の先生。牧師。 映画館のオーナー。空港従業員。政府の Officer。ストア経営。ナンマルキ (島の King)。詳細はピンゲラップ島の職業の表を参照
食物	タロイモ、ココナッツ、バナナ、ブレッドフルーツ、魚、蟹、パンダナス、 ライム、米 (輸入)、小麦粉 (輸入)・鶏・豚
婚姻	母系 (4 つの母系集団)。一夫一婦。
禁止	日曜日の労働 (水泳も含む)。島での飲酒 (実際はしている・・・)。女性の 外海での漁。
医療	Dispensary が一つある。医師と看護師はおらず、Health Assistant という職 種の人が二人とその他のスタッフが二人で合計 4 人が従事する。
電気・水 道	ソーラー発電・雨水
通信	Dispensary に wifi、無線が設置されている。



[図1] ピンゲラップ環礁写真 by Google Map

Sukoru や Daekae では沢山のカニが土の中に巣を作っており、ピンゲラップ島よりも数多く見つけやすいので、人々はボートで採りに行く。Sukoru までの所要時間はボートで 15 分くらい。二人で 30 分滞在すれば、20 匹~30 匹は採れるだろう。近所のスーパーに車を走らせてカニを買いに行くような、気軽な距離である。

ピンゲラップ島は 1990 年には人口が 1000 人を超えていたが、昨今では急速な人口の減少が目立っている。2017 年 5 月の人口は 216 人、7 月の人口は 183 人、翌月の 8 月には 167 人になった。この急速な人口の減少は、島の人口に対して職がなく、子供を養育するための収入を得ることができなかつたため、多くの人々がアメリカ、グアム、フィジー、本島のポンペイ島などにわたってしまったことによる。また、病気や出産のために病院への受診が必要で一時的に島を出たものの、帰りのチケットを買うお金がないために、ポンペイ島の親戚の元に身を寄せたままになってしまっている人も一部にはいる。

アメリカと FSM は 1982 年に、US から FSM への 15 年間の財政支援を保証する Compact of free association を結び、1986 年からこれが実施となった。その後、2003 年にこの契約の修正案が議論され、20 年間の財政支援が追加された。そのため、少なくとも 2023 年までは、自由に行き来が可能であるとされている。2023 年に契約が終了するか継続するかは、両国の代表に運命が委ねられている。また、5 年か 10 年以上アメリカに住んでいる FSM の人であれば、アメリカの市民権を得ることも可能であるという。これは条件を満たしていれば決して却下されないものだそうだ。

アメリカで働いている家族の職業を聞いたところ、KFC で働いている、洋服店でレジ、スーパーでレジ、カレッジで清掃だという。ミクロネシアの高校を卒業せずにアメリカに渡った場合は、レジや清掃の仕事に就くことが多いようだ。

2. ピンゲラップ島のセクション制度

この島は大きくセクション1～4にわかれている。ランドマークをもとに地域別に分かれてはいるが、家系としてセクション3に所属していれば、現在住んでいる場所がセクション4であってもセクション3に所属することになる。セクション制は教会での礼拝や、カヌー作り、そしてカヌーのコンペティションなど、あらゆる島の行事で機能している。

島が一つの共同体なので、それぞれが互いの事をよくわかっている。よって、職場があっても、厳格な時間厳守ではなく(一応8時から12時がMunicipal office, 8時から3時がelementary school)、遅刻しても良さそうだった。人に聞けば誰がどこにいるかだいたい想像がつくため、多少いい加減でもなんとか回るようだ。島を歩いていると、道端に座っている人たちに何度もなんども「どこに行くの?(ヤーカナラ)」と聞かれる。時々「どこから来たの?」とも聞かれる。これは私だけにではなく、住人の間でも投げかけあっている質問のようで、多分こうやって互いの位置情報や、島の出来事を共有している。実際、私が昨日したことは、翌日には島の人に伝わっているようだった。情報伝達が早く、秘密は存在しにくい。

[図2]セクションの分け方 (photo by Google Map)



- section1 Elementary school～ナノワ (二番目のナンマルキ) 宅手前まで
- section2 ナノワ宅～Ohsan Ernest 宅の手前まで
- section3 Ohsan Ernest 宅～Municipal Office 手前まで
- section4 Municipal Office から大きな Church まで

3. ピンゲラップ島の職業

[表2]ピンゲラップ島の職種・人数一覧 (informed by Ohsan Ernest)

職種		職種	
School Teacher	6	Administrative Officer	1
Dispensary	4	Maintenance	2
PPA(Pohnpei Port Asology)	1	Public work	1
CIA	1	Prosecutor	1
Local Government	1 1	Deffnder	1
Mayor	1	Churchist	2
Police	4	Clerk	1
Genitor at Office	1	Total	39

島の人口の約 1/4 が固定職を持っている。他の人は自給自足の生活をしているか、職を持つ家族（海外にいる家族からの仕送り含む）、によって支援されて暮らしている。

空港で働く男性は二人の子供がおり、とても安い給料だがないよりはマシだと言っていた。みんな基本的にその職業になりたくてなったというよりも、空きがあったからやっているという感じがする。「どうしてその職業を選んだのですか？」と聞くと、どうしてそんな野暮なことを聞くのだろうという表情をされる。ヘルスアシスタントの O さんは島の人の健康を守りたかったからと言っていた。

私のお世話になった全色盲の男性は皆、上記のような固定職を持たず、釣りに行ったり、豚の世話をしたりと、自給自足の生活をしてきた（全色盲でなくてもこのような生活をしている男性はいるので、障害があるからということでもなさそうだ。どちらかというと High school を卒業しているかどうか職を得られるかどうかに関わっているようだ）。全色盲であるかないかにかかわらず、自給自足生活をしている若い世代は、職を得るために、いつかまたこの島を出なくてはならないという気持ちがあるようだ。しかし、この島に帰ってきたいという思いが強い人多そうだ。また、島の人多くは現在、アメリカに家族がいる場合が多く、そういった家族が生活費を送金してサポートしてくれているようだった。

4. ピンゲラップ島の宗教

ピンゲラップ島はプロテスタントである。ほとんどの人がクリスチャンだが、島には

特別なクリスチヤンの組織がある。この組織に所属していない人の中には、自分がクリスチヤンじゃないと勘違いしている人もいる。

讃美歌のほとんどはポンペイ語だという。しかしピングラップ語で書かれた新しい讃美歌も存在する。教会で歌う時、ポンペイ語の方は番号で曲を指定される。一方でピングラップ語の場合は多分タイトルで示されるようだった。

この島の教会はすべてプロテスタントである。讃美歌はポンペイ島から持ってきた讃美歌の本であるためポンペイ語で書かれているらしいが、ピングラップ島の人の中に讃美歌を作れる人が何人かおり、そういう人がオリジナルの讃美歌を作っているため、ピングラップ語の讃美歌も新旧共に存在するらしい。月曜日から日曜日まで毎日朝の礼拝があるが、日曜日の朝の礼拝は10時からである。その他の日は6:45~7:00の間で行われる。また、水曜日と金曜日と日曜日は17時から夕方の礼拝もあり、金曜日の夕方の礼拝は女性だけで行われる。

女性だけの礼拝では、祭壇に6人の女性が上がる。この役割は3か月で交代される。真ん中の右側には、セクション3・4の representative person が立ち、左側にはセクション1・2の representative person が立っていた。また、その representative の隣には、secretary、song leader の順で二人の女性が並び、それぞれ自分の所属するセクションのサイドにかたまっている。Song leader は歌い始めをリードする。最初のお祈りと歌は、3・4。続いて1・2の順で行なわれているのを見ることができたが、この順番はもしかすると逆でもいいのかもしれない。何よりも、セクションというものがこの島では非常に機能的な分類となっていることがわかった。

[写真]島で一番大きな教会。セクション1~4が合同で使う。



5. 島の政治

島には Nahmwariki ナンマルキと呼ばれる king がいる。ナンマルキを筆頭に8人の

階級となっている。2012年に前ナンマルキが亡くなって新しいナンマルキになった。最も新しいナンマルキまではみんなピングラップ島に暮らしていたが、現在のナンマルキはポンペイ島に暮らしている。住民はそのことに対して少しだけ不満そうであった。ナンマルキの representative (二番目のナンマルキ) のナノワはエレメンタリースクールの校長先生として働いており、この島にいる。Kahlek という伝統的な漁では、漁の行われる約4か月の間に、ナンマルキに魚を届けに行く儀式のようなものが3回あるが、現在のナンマルキは島にいないため、ナノワが代わりを務めているという。ナンマルキは家系で決まっているようだ。Salomon という苗字がその家系に当たるらしい。住民はナンマルキに直接話しかけたり、特に頼みごとをすることは許されない。Nahneken ナネケンという messenger を務める階級があり、その人を介してのみ、ナンマルキと会話することができる。ステイ先の O さんの叔父にあたる人が現在のナンマルキ Dr. Berysin Salomon であった。彼は医者であり、現在はポンペイ島で自分のクリニックを営んでいるようだ。新年の家族で集まる時はどんな感じなのか聞いてみた。一緒に笑いあったり、「お茶は如何ですか？」などの問いかけはいいようだ。多分、島の政治や伝統に関して、決断を要するような会話をするなどの時は、messenger を介す必要があるのだろうと思われた。

また、ナンマルキは Kahlek に行かない。ナンマルキは漁師たちが家に帰ってくるのを待ち、Kamelis というココナッツを削ったものを混ぜたバナナやタロイモを漁師たちの採ったトビウオと交換に渡すのである。これは Kahlek のある各月に1回ずつ行われる儀式である。

6. ピングラップ島の言語

言語はピングラップ語である。ピングラップ語は殆どポンペイ語と同じらしく、ポンペイ島の人にはピングラップ語を解すという。ただし、ポンペイ出身者はピングラップ人の言葉がたまにわからないと言っており、現地の人々の感覚として20~30%くらい、ピングラップの独自言語があるようだ。例えばピングラップ語の「カキヤシ (おやつ)」という言葉は、ポンペイ島で生まれたピングラップ人には伝わらなかった。一応、ポンペイ島で生まれたピングラップ人も、ピングラップ語を話しているということにはなっているのだが。

ここでポンペイ島の言語状況についても少し触れておくと、ポンペイ島ではポンペイ語が現地語となるが、言語が似ているのはピングラップ語とモキール語だけらしく、チューク州、コスラエ州、ヤップ州などの言葉は全く異なっているのだそうだ。であるの

で、ポンペイ島外から出てきてポンペイ島に暮らしている人同士は、同じ FSM の国民であっても、英語で会話することになる。

Elementary school は 8 年間あり、ピングラップの学校で学ぶ。その後、多くの人は 4 年間ポンペイ島の High school で学ぶことになる（ドミトリーがある）。英語教育は Grade 3 から導入されている。ポンペイの high school でさらに英語などを学ぶことになる。英語の学習の期間は人によりまちまちだが、高校を出て（or 中退して）そのままピングラップに帰ってきた人の英語力は、そこまで高くないと思われる。しかし、現在のピングラップに暮らす子どもでは英語に通じる子どもも多い。インターネットが島に導入されたことで、多くの子供が英語で動画を見たり、英語での Facebook のやり取りを見るようになったからだという。年配層では、多くの人聞き取れるが話せない状況だそう。英語が比較的話せる人は、ポンペイ島で働いていた経験があるとか、そういう人が多いような気がする。

7. ピングラップ島の婚姻

婚姻などの形態は母系であるが、結婚とともに男性側の姓に入るのが一般的である。また、養子の慣習がある。

8. ピングラップ島の食

食事は基本的にはタロイモ、バナナ、ココナッツ、ブレッドフルーツ、魚（自分たちで釣ったもの）、蟹（島の土の中に住んでいる）、米（本土から届いたもの）であり、魚はほとんど毎日のように食卓に並ぶ。魚の調理法は、揚げる、焼く、煮るがメインで、時々塩漬けにして乾燥させている。この島には年に 2 回ほどしか船が来ない。また、飛行機が月に 6 回くらいレギュラーフライトを運行しているが、パイロットが一人しかいないため（現在、後継もいないため、多分グアムからパイロットを雇うことになるだろうと、ピングラップ島の CIA 従事者が言っていた。追記；私が帰る飛行機で初めて日本人のパイロットが後継者として紹介された）、彼の体調や都合に左右されて、運休などもあり不安定である。この飛行機にはあまり重いものを積むことができないため、米などは基本的には船で運ばれることになるので、船が来ない時には米不足に陥り、ローカルフードであるタロイモなどに頼って生きることになる。ブレッドフルーツにはシーズンがあり、10 月から 11 月頃はあまり取れないようだ。また、ブレッドフルーツにも二種類あって、種があるものとないものがある。味が違うようで、種ありの方は非常に

甘く、茹でる時に砂糖を入れなくても十分なのだそう。また、その種もまるでナッツのようで美味だという。ブレッドフルーツは日本でいうと、金時芋とジャガイモをハイブリッドした高級な芋という感じがする。まろやかで甘く、スイーツにもおかずにも使える。

パンナダスの Planting は非常に簡単で、葉っぱをカットして、それを穴に埋めるだけである。パパイヤは、食べ残しの種をその辺に棄てれば勝手に成長するそう。バナナも簡単で、パパイヤと同じくらい単純だそう。バナナの収穫は Planting した後5～7年後？ヶ月？。ココナッツは5年後。タロは2～3年後。

この島の食材は非常に豊富で、米不足がある以外、食料に困ることはないのではないかと思われた。釣れた魚を食べきれずに腐らせることもあるそう。



[写真]タロイモ、バナナ、刺身、ドーナツ、パパイヤ、ライス（毎日の定番）



[写真]朝食はパンケーキ、バナナ、スパムなども並ぶ

[写真]ブレッドフルーツのいろいろなレシピ。



ブレッドフルーツを練って団子状にしたものがココナツミルクに入っているもの



真ん中にあるのが、フライドブレッドフルーツチップス。実に美味。



ブレッドフルーツを茹でたものに、砂糖とグラインドココナツの絞り汁を混ぜて半ペースト状にして食べる。



グラインドココナツの絞り汁を加えて茹でただけのシンプルなブレッドフルーツ

9. ピンゲラップ島の漁①

島には大きく二つのタイプの釣りがあり、ボートで外海に出るタイプと、内海の珊瑚礁の上から糸釣りするタイプがあり、後者は海辺からサンゴ礁を歩いていく形態のものである。これは、月が高く上がってから、月光の下で行われる釣りであり、子どもも女性もすることが許されている。一方のボートで行くものは、男性のみが許されており、伝統として女性の外海での漁は禁じられている。不吉なことが起こると信じられているからだ。朝行く場合もあれば、夜に行く場合もある。漁に出るタイミングは、各世帯の食料である魚が足りているかいないかであり、足りないと思えば取りに行くという、非

常にシンプルなスタイルである。しかし、日曜日は休日と決まっており、働いてはいけないという決まりがある。この日は、釣りに行くことも、スイミングをすることも禁じられている。よって、日曜日に何もしなくてもいいように、人々は土曜日のうちに漁に出て料理を済ませ、日曜日は10時からと17時からの二回、教会に行くだけでいいように準備する。(実際は、作り置きすると腐ってしまうものもあるので、何かしらの料理の工程は日曜日にやらざるをえないようだ)

島の男性の仕事は漁師だが、これは自分たちが食べる魚を取るという目的がメインとなっている。よって、外に輸出するという事は殆どしていないようだ。島の中で、売り買いがある。50セント/1ポンド。ステイ先のOさんは、昔は三ヶ月に一度 Salted Fish をグアムに住んでいる兄に送り、兄を介して、グアム在住のピンゲラップ人に販売していたそうだ。40ポンドあたり300ドルだったらしい。しかしここ最近ではスターフィッシュが取れなくなり、ほとんど送ったりしていないそうだ。この島の漁業による安定収入はないと考えて良さそうだ。

[写真]カヌーでの漁(左)、ボートでの漁(右)



[写真]トビウオの乾物作り。新品の塩の容器うち半分を消費するそうだ。



10. ピンゲラップ島の漁② ~Kahlek~

外海での漁のうちピンゲラップ島の伝統的な漁の Kahlek は特別である。これは島の男たちが最も誇りに思っている漁と言っても過言ではないかもしれない。Kahlek はピンゲラップ語で「Dancing」という意味である。これは、揺れるカヌーの上に立つと、バランスをとるためにみんなダンスのような動きをするということに由来している。カーレックは1月から4月の頭まで行われる。この時期に、トビウオが一番 Pingelap 島に近づくのだから。1月の満月から三日後の夜に始まる。Kahlek の初日には、ナンマルキにトビウオを届けに行き、トビウオと交換に Kamelis(グラインドココナッツをタロイモやブレッドフルーツなどに混ぜたもの)をナンマルキから受け取るという儀式がある。これは、2月と3月にも行われ、計3回行われるが、4月には行われぬ。男たちは、カーレックに使うための新しいカヌーを1年置きにセクションごとに作るようになる。しかし、カヌーを作り始める前に嵐が来ると、その年のカヌー作りは中止になる(カヌーを作り始めてから嵐が来た場合は、カヌーを完成させる必要がある)。その理由はよくわからないが、伝統としてそうなっているようだ。カーレックに使う大きいカヌーに関しては一年置きに作るというルールがあるが、その他の小さなカヌーに関しては毎年作る。新年には何かしらのイベントが企画されるが、この際にカヌーレースをやることをその年の代表(Traditional 部門と Religious 部門があり、この部門が交互にその時の新年の行事を決める権利を持つ。両方に所属していて、どちらの年においても決定権を持つ人もいる)が決めれば、カーレックに使うカヌーで新年にレースが行われる。多分、2018年は1月3日くらいに行われそうであった。かつて(1960年代1970年代)は、20~40隻のカヌーが Kahlek に出ていたが、最近ではみんな怠慢になり、しかも人口も減っているため、4隻くらいしか出ないこともあるようだ。カーレックのやり方は以下である。

- ・一年のうち一番最初のカーレックは1月の満月から三日後の夜である
- ・各カヌーに乗るメンバーはカヌーの持ち主(固定職があり、お金のある人が購入するケースが多い)が選ぶ
- ・一度選ばれると、その年はおなじメンバーで毎日漁に出ることになる
- ・カヌーの数が少なければ漁に出る人数も減る
- ・怠け者の人はメンバーになることができない(補欠の)こともある
- ・翌年はメンバーチェンジがあるが多分同じメンバーでも良いと思われる
- ・たいていの場合、メンバーは同じセクション(主には親戚内)から選ばれる

- ・月に1回、ナンマルキたち (Traditional leaders) の元にトビウオを届ける儀式がある
 - ・ナンマルキ達とその妻たち (子供を除く) は Kamelis を用意して漁師の帰りを待つ
 - ・Traditional Leader が漁師を待つ場所は、レンツテルの家の、通りを挟んで海側にある小屋で、この敷地は昔大きな大きなナンマルキの家が建っていたが、壊れてしまったので、人々はちいさな小屋を作ったそう
 - ・漁に出た男性を親戚に持つ家族もまた Kamelis を用意しなくてはならない。漁の初日 (各月に1回) には、漁に出た男性がナンマルキだけでなく親戚にもトビウオを持って帰ることが決まっているからだ。
 - ・もしも親戚に配れるだけのトビウオを得ることが出来なかった場合、彼は自分の家に近い家族から順に配れる分を初日に配る。そして翌日、残りの家族に配る。(とにかく初日から数日の間に、一度は親戚にトビウオを配らなければならない。) すべての家族に配り終えたら、残りの日はそのトビウオを自分のものにしても良い。
 - ・もしも親戚の誰かも Kahlek に出ていたら、その家にはトビウオを持っていく必要はない
 - ・Kahlek の期間も普通の漁をすることは許されている
 - ・漁は月曜日から金曜日に毎日。嵐だけ休み。
 - ・月が高く上がっている時はダメ。月が落ちてから太陽が昇るまでできる。早朝の4時頃までは漁に出ても OK だが、日が昇るまでに漁を終える必要がある。
- 例) 夜の8時に月が低くなる日があったとしたら、その時間から漁に出ることができる。松明の保つ時間はトビウオの量次第だが、10時か11時くらいには漁が終わるイメージだそう。
- ・カヌーに乗る四人がそれぞれ1つの松明を作る。松明を作るタイミングは各人が好きな時間でいい
 - ・漁に出るまでは、カヌーはそれぞれの家で保管されるが、漁の準備が始まると同時にカヌーは浜に並べられる
 - ・初日は、並べられたカヌーの一番右側のカヌーから順に漁に出る。二日目は、並べられたカヌーの一番左側のカヌーから順に漁に出る。三日目はまた右側から漁に出る。これを交互に繰り返す。(Kahlek の期間を通して、各カヌーが採るトビウオの量を均等にするため)
 - ・漁の最中、半月状のカヌーの配列は前後の順番を回転しながら移動する。そうすることで、採れるトビウオの量が平等になるようにする。1番目と3番目に先頭になったカヌーが最も多く取れやすいので、それがローテーションを繰り返す中で平等な機会を持つ

てるように調整するのだ。

- ・ 4つの Torch は合計で1～2時間保つが、トビウオが多いと Torch を掲げておこなくてはならないので、Torch の消費早い
- ・ Torch がなくなったら帰ってくる
- ・ 一つ目の Torch は海岸でつける
- ・ 二つ目からの炎は一つ目の Torch から移す
- ・ 一つのカヌーに4人の男性が乗る
- ・ かつては20～40のカヌーが漁に出たが最近は4～10くらい
- ・ カヌーの4人の男性にはそれぞれ役割がある
- ・ Front の人 ネットでトビウオをキャッチする
- ・ 二番目の人 paddling する
- ・ 三番目の人 Torch を持ってトビウオをおびき寄せる
- ・ 四番目 (Back) の人 paddling するかネットでトビウオをキャッチする
- ・ カヌーは全員で一丸となって一回の漁を行う
- ・ カヌーが三日月のようにラインを作るのは、トビウオを囲い込むためである
- ・ トビウオがいなくなると Torch をカヌーに下ろして寝かせる (炎は弱くなる)
- ・ トビウオのいる場所までカヌーを動かして、トビウオがいる場所にたどり着いてから、再び炎を高く掲げる
- ・ 一つのカヌーで均等に分ける
- ・ とったトビウオは取りすぎると腐らせることがある
- ・ かつては火で燻してスモークトビウオにしていた。それは6カ月は保つ。
- ・ 最近はスモークトビウオは作らないで、腐らせてしまうか、Salted にする
- ・ 売ったりしないで自分たち用。飛行機があれば、Pohnpei の家族に送ることも
- ・ トビウオをたくさん取ると、カヌーが沈むことがある。その時にトビウオを食べるために集まってくるサメが人を咬むことがあるので危険である。ある漁師はサメは人を食べると知っているし、ある漁師はサメは人を間違えて噛むだけだと思っているし、ある漁師はサメは人を恐れているから噛まないと思っているし、認識はまちまちだが、サメが危険という認識だけは不思議と全員一致している。
- ・ その時に島にいる全てのナンマルキと奥さんが、通りを挟んでレンツテルさんの家の向かいの敷地にある小さな小屋に集まって、Kamelis を漁師に渡す
- ・ 漁に行く前には禁止事項がある。これを破ると、Ikisang イキサン；Torch にトビウオが近づいてくるが折り返して遠のいてしまう現象のこと、もしくは Needle fish に刺さ

れて怪我をするという形で、“悪い事”が起こるとされている。禁止事項は以下の5つである。①imported things を漁に持ち込んではいけない。例) フラッシュライト (→松明を使う)、beach sandal (→裸足で行く)、チューインガム、ロリポップスなど→イキサシ ikisang が起こる。②kahlek に行く4時間前からは何も食べてはいけない。ローカルフードでもダメ。→イキサシ ikisang が起こる。ただし、Crab だけは食べても良い。③Sex ダメ→Needle Fish に刺される。これを破って Kahlek の後に病院に運ばれてきた患者をたくさん見てきたと、ヘルスアシスタントはいていた。④糞 (人、鶏、豚全て) を踏む→イキサシ ikisang。⑤汚いものに触ったり、臭いものに触れてはダメ→ikisang。その他、人によっては行く前に必ずシャワーを浴びるという。

迷信を信じない男性もこれらの禁止事項は実体験を通じて強く信じているということだった。

・カヌーのオーナーによって漁のメンバーに選ばれなくても、決して恥じるべきことではないらしい。オーナーの家族内から構成されることが多いため、そもそも選ばれるメンバーと機会は限られていく。

2017年は長い長い Kahlek の歴史の中で、唯一 Kahlek が行われなかった年となった。Kahlek はカヌーでのみ行うことが許されているが、2017年はカヌーが一隻しかなく、実施できなかったという。足りないカヌーを準備する時間はあったはずだが、昨今、島の人々は怠慢になっており、準備しなかったのだそうだ。それをクールじゃないと感じる人もいれば、どうでも良いと思っている人もいるだろうということだった。昔はカヌーの作り方や weaving のやり方を親から子供に教えていたが、最近ではそれらの作り方を教える親も減っており (よって weaving ができない若い女性も増えており)、将来的にはこれらの文化が島から消えてしまうだろうということだった。

[写真]Kahlek で使われる Torch



[写真]Kahlek で使われるカヌーを1年おきに作る



1 1. ピンゲラップ島の禁忌

この島ではアルコールも禁じられている。その理由は定かではないが、ある人が言うには、酒を飲むことで人々が教会に行かなくなり、怠惰になったために、ナンマルキが島の荒廃を危惧して禁止したという説がある。しかし、島の男性の多くは、週末の金曜～日曜日にかけてアルコールを摂取している。水に砂糖とイースト(パン作りに使う用)を入れて8時間発酵させると酒ができるらしい。それはまるで日本の Kirin beer のようだと言っていた。刺身や fried Bread fruits をあてにして飲んでいるそうだ。飲み過ぎで大声を出したり、喧嘩した場合は警察に捕まることになる。そして、大通りの草むしりを罰として一年間、毎朝することになる。炎天下の下で。中には刑期のうちにもう一回捕まって、二年間の草むしりをすることになった人もいるという。しかし、アルコールを飲んだだけでは決して捕まる事はない。

1 2. ピンゲラップ島の医療

ピンゲラップ島には医者や看護師がいない。船が年に2回ほど来るが、それに乗って医師がやってくるそうだ。週末の3日間ほど診察業務などをして、また島を去っていく。この島ではもう長いこと、医師が常駐しているという状況はないようだった。Health Assistant はポンペイ島で9か月間の研修をして資格を取得する。たった9か月の研修で、あとは島に帰ってきて、ほぼ医師と看護師の役割を担わなければならない。

Dispensary は基本的に 8 時半頃に開き、12 時に閉まる。しかし、Health Assistant がどこに住んでいるかなどは島の人全員が知っているので、時間外でも、緊急でも、Health Assistant の家を尋ねれば用は済む。現在二人いる Health assistant のうち女性の方は 2018 年に退職となるので、新しい人を探さなければならないという時期にある。人員を探して教育を行うのは、ポンペイ島の州病院である。Dispensary にはソーラーエネルギーから、wifi、無線機など、島の通信に関わる全てのテクノロジーが集結しているので、医療知識として何かわからないことがあれば無線機ですぐに相談できる環境は整っている。この無線機は、ポンペイ島の空港との連絡に使われたりと、医療だけに拘らずに使用されている。また、wifi は 2010 年にこの島に導入された。それ以降、人々はタブレットを持つようになり、朝や夕方の時間はタブレットで Facebook を楽しむ人が dispensary の周りに沢山集まってくる。

先にも述べたように、Health Assistant は病気の診断も行わなければならない。糖尿病などの診断も行い、薬を処方していた。また、聴診器で雑音を聞き分けて COPD の診断までするらしい。精神病の患者もおり、その人たちに毎日薬を飲ませるのも彼らの仕事である。精神病の患者が病院に現れない時は、患者の元を訪れて、水と薬を飲ませる。訪問診療のような感じであった。ただ、Health Assistant は患者の経過を毎日医師に報告するわけではないらしく、医師が経過を観察するのはあくまでも船で訪れた時のようだった（もしくは緊急で無線で相談する必要がある場合のみ）。つまり、精神病を患っている場合に、症状の変化に伴って薬の量を変えるなど、そういう細かな管理は不可能だと思われた。しかし、島民が Health Assistant の診断や誤った処方でも重大な健康問題を被っている様子は見受けられず、住民の Health control は非常にうまくいっているように思われた。

島の問題になっている病気は、NCD である。痛風もいるそうで、魚が原因ではないかという話をした時に、ヘルスアシスタントもそれを疑ってはいるようだったが、定かではないという顔をしていた。しかし、魚の摂取量の割には、痛風が高い頻度であるということでもなく、患者として名前が挙がっていたのはわずかであった。糖尿病は結構深刻にも感じた。なぜなら、糖尿病で片足を切断するまでに至った島民も（1 名？2 名？）いるからである。

薬は時々足りなくなることがあるという。ポンペイ島の病院の薬を確保するのが優先であるので、ピングラップ島の薬は、それが満たされている場合のみ、余剰分が飛行機や船で運ばれてくることになる。

島の平均寿命は 60 歳という印象だと Health Assistant の女性はいっていた。しかし

80 歳を超える老人が二人いるので、かなり長寿の島とも言える。確かにこの島にいる高齢者はみんな健康そうで、特に大病をしている様子も見られない。現在はがん患者もいない（癌患者がいたら、Pohnpei に送らなくてはならない）。砂糖の摂取は多い気がするが、基本的にはローカルフードを食べるので、添加物の少ない食生活はがんの発生率を下げているのだろうか。この島の遺伝的な素因として、がんになりづらい可能性もある。女性たちの体格が立派なのは、間食にも刺身、ライス、タロ、バナナ、ドーナツ、カリントウ（現地ではカリンドー/カリンドンなどと呼ばれていた）などを食べるからだ、現地の人々は笑っていた。

[写真]カリンドン（ねじって揚げた小麦粉の生地に砂糖がまぶしてある）



妊婦は、第一子はポンペイ島の病院で産まなくてはならないが、緊急の場合や、渡航するお金がない場合はこの島で産むことになる。船や飛行機の往来に合わせて、予定日の一ヶ月か二ヶ月前にポンペイに渡り、出産までの時間を親戚と過ごすことになる。島でのお産の場合、子供を取り上げるのは Health Assistant の仕事である。

救急の患者が出た場合は、ポンペイの州立病院に無線を入れる。州立病院が飛行機のチャーター代を出してくれるそうだ。しかし、飛行機は CIA (Caroline Island Air) のみなので、唯一のパイロットである Alex*が島外にいるときなどが問題になる。そうだった時は、小さな船をチャーターすることになるらしいが、船だと 12 時間～1 日くらいかかるので、間に合わないケースもあるそうだ。しかし、急患が出ることはそこまで多くない。2017 年 8 月現在、2017 年に入ってから急患は出ていないそうだ。またヘルスアシスタント歴 15 年のオーサンが経験した急患は 1～2 回だと話していた。

[写真]CIA の飛行機(左)、ボスの ALEX と 8 月から採用された日本人パイロット(右)



※2017 年 8 月 30 日の飛行機より、日本人のパイロットが雇われた。

島では Local Medicine も使われている。ちょっとした歯の痛み、頭痛、風邪、下痢なら、彼らは Local medicine で治す。スペシャリストが一人いるわけではなくて、それぞれが異なる知識を持っている。頭痛と歯痛を治せる人がいれば、下痢を治せる人がいる。バナナの葉っぱも Local medicine の一つだそうだ。潰して沸騰させたお湯に入れて飲むだけで、西洋医学の薬よりも効くという。病院ではお金を払う必要があるが、その余裕がある人はこの島では少ない。Local medicine であれば、例えばココナッツと引き換えに治療してもらったり、物々交換が可能な場合もあるそうだ。しかし人によっては金銭を要求する時代に変化しつつあるそうだが。

それぞれの分散した知識を一つの本に統合すれば、みんながその治療をできるし、ある治療の専門家がどこかに行っても、その知識をシェアできるからいいのではないかということをお話すると、そうすることによって、知識を持つ人がその知識を使って金銭や何かを得ることができなくなってしまうということだった。薬草の知識を持つ人は、それでお金を得ることができる専門家なのだ。

Dispensary で薬を買う人と、Local medicine を使う人のどちらが多いかという議論に関しては島民の中でも意見が分かれる。Dispensary で働く女性は、Dispensary で薬をもらう人が多いだろうと話していた。支払いに関しては、患者がお金が出来た時に払うというシステムを取っているらしい。よって人によっては一生支払うことなく亡くなる人もいるそうだ。しかし、そういった支払い形態についてはポンペイの州立病院に全て説明しており、“お金よりも命が大事だから”ということで、支払えない患者でも薬を処方して良いことになっているそうだ。

[写真]Pingelap Dispensary
(写真左側)



13. 日本時代の面影

8月28日には毎年「ヒンピョウカイ（品評会）」と呼ばれるものが行われる。これはGreen dayに合わせて、参加者がピンゲラップ島の作物を持ち寄り、その重さを計測。一番総計が重かったグループに10ドルが渡されるようだった。また、政府から指定された作物をPlantingすると、それに応じた報酬が政府から渡されるが、その支払いもこの日に行われた。

他にも、「かりんどー（かりんとう）」と呼ばれる、かりんとうそっくりのひねり菓子が存在したり、「ワッセーノーホイ！」という「いっせーのーっで！」にそっくりの掛け声でKahlekのカヌーを引っ張ったり（かつてはカヌーを引くときの歌があったそうで、その幾つかの言葉はピンゲラップ語ではなかったもので、日本語が語源ではないだろうかと島の人と言うのだった）、「カンソクショ（観測所）」や「エサ（兵舎）」と呼ばれる日本統治時代のコンクリート造りの構造が残っていたりする。「サシミ（刺身）」「タワシ」、「ソーリ（草履）」、「ジドウシャ（自動車；これはポンペイだけかもしれない）」という言葉も使われている。また、人の名前もYasuo、Kodaro、Dosiuro、Aiko、Akina、Marikoなどという名前の人がある。ピンゲラップ島の人の中には日本人の混血の人もあり、そういう人のことを島民の人は「Oriental Face」だと言っていた。また、食事においても、刺身を食べる際に醤油を使う習慣があり、人によってはワサビのチューブを家庭に持っていた。

住民の若い世代の人は、日本時代の悪い話などは聞かずに育っている人が多いようだった。一方で、60歳を超えた島の歴史に詳しい人の中には、日本人が島にもたらした悪い過去の物語を心に留めている人もおり、その人が当時の日本の話をする時の口調には、批判的な気持ちが込められていることが汲み取れた。日本によるミクロネシアへの暴力と抑圧の時代があったことが感じ取れた。

[写真]エサ（兵舎）と呼ばれるコンクリート造りの構造物が残る



[写真]8月28日に行われる“ヒンピョウカイ（品評会）” Municipal Office 前にて



II. ピンゲラップ島の全色盲

1. 概要

現在、ピンゲラップ島には全色盲者が15人住んでいる。ピンゲラップ島で生まれ、存命の全色盲者は約33名ほどいると思われたが、うち9名はUSAに移住、4名はポンペイに移住、4名はグアムに移住していた。

ピンゲラップ島に暮らす15名のうち5名の男性が漁師である。残る10人は成人男性が一人（糖尿病で足を切断して働けなくなった）、男児が一人（6歳）、女児が一人（6歳）、成人女性が7人である。合計で男性が7人（6歳～）、女性が8人（6歳～70歳）。常染色体劣性遺伝なので、ほぼ同率で発症していると思われる。

成人の全色盲女性7人のうち2人が既婚者で、うち一人は妊娠中であった。また、結婚していないが二人の子供がいる女性が一人と（子供のうち女児が全色盲で、その父親はピンゲラップ出身・在住。）、養子を取った女性が一人いた。男性は一人を除いて全員独身であった。唯一既婚者の男性は、全色盲の子供を3人（男子1・女子2※全員上記に含まれている）持っている。全色盲でない兄弟は、アメリカで暮らしているようだ。しかしピンゲラップ島内での聞き取り調査によれば、男性の独身は正常色覚でも多く、色覚異常のせいで結婚できないということはないようだ。29歳の男性はこれまでに3人くらいの女性と交際したが、自分の意思で結婚しなかったらしいという話を聞いた。また、全色盲でもアメリカに移住した人はたくさんおり、色盲の有無と移住の有無は対応していない。

[表3]ピンゲラップ島の全色盲者一覧（匿名で表記・2017年8月時点）※色分けは同世帯のくくり

	性別・年齢	職業など	婚姻など	色覚の特徴と色覚テストの有無
#1	M・47	自給自足（漁師）		1～3表× 黄・緑・赤・青見える？
#2	F・	自給自足		白黒のみ（テストなし）
#3	F・	自給自足		白黒のみ（テストなし）

# 4	F・24	Sunday school Teacher (Volunteer)		1・3表 OK 表2は5に見える 白黒のみだが、昼 間にオレンジと赤 がクリアに見える ときがある
# 5	M・20	自給自足（漁 師）		1・3表 OK
# 6	M	働けない	既婚	（テストなし）
# 7	M・29	自給自足（漁 師）		1・3表 OK
# 8	F・25	自給自足		1～3表× 白黒 のみ
# 9	F・26	専業主婦 / Weaving	既婚	白黒のみ
# 10	F・6	小学一年生		（テストなし）
# 11	M・34	自給自足（漁 師）		（テストなし）
# 12	M・31	自給自足（漁 師）		1・3表 OK 黄・青・赤（夜のみ 色見えるときあ る）
# 13	F・68	Weaving	養子あ り	1～3表×
# 14	F・27	専業主婦	既婚	
# 15	M・6	小学一年生		（テストなし）

[表4]色覚検査結果 ※色分けは兄弟のくくり

	#4	#5	#9	#8	#7	#14	#12	#1
表1	7	7	7	なし	7	7	7	なし
表2	5	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし
表3	4	4	なし	なし	4	4	4*1	なし

38	上	完全な丸	上	上	上	上	上	上
37	完全な丸	なし	なし	なし	なし	完全な丸	なし	なし
36	なし	なし	なし	なし	完全な丸	完全な丸	なし	完全な丸
35	下	下	完全な丸	なし	下	下	完全な丸	完全な丸
34	左	右	完全な丸	なし	左	完全な丸	四角	完全な丸
33	なし	完全な丸	完全な丸	なし	なし	完全な丸	なし	完全な丸
32	なし	丸が見えるが複雑な柄で説明できない*2	なし	なし	なし	なし	なし	完全な丸
19	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし
18	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし
17	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし
16	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし
15	なし	右に L or 1 見える	なし	なし	なし	なし	なし	なし
14	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし
13	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし
12	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし
11	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし
10	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし
9	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし
8	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし
7	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし

6	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし
5	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし
4	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし
3	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし
2	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし
1	1 2	1 2	1 2	1 2	1 は見え たが 2 が 見えづら い*3	1 2	1 2	1 2

*1) 一回目のテストでは見えないと言っていたが、二回目では、見えないと言った後に、やはり見えると訂正が入った

*2) どうやら正常の人と同じような複雑な模様が見えてるようだ

*3) もしくは見えるが2だということに気づかなかった

島の全色盲の人たちの視覚的な状況は一人一人全く異なっている。兄弟の間ですらまったく違う結果となった。視力が非常に悪く、対象自体が見えないと思われる人もいれば、色覚テストで全色盲の人にはかなり見えないはずのものが見える人もいる（テストは石原表の原本で行っておらず、パソコンのモニターを介して行った）。また、なぜか1・3表が見えるというケースが散見された。全色盲であれば、1表以外は見えにくいと言われている。また、みんな基本的な色覚は白黒らしいのだが、人によっては昼間だけ他の色（赤・オレンジ）が見えたり、夜になると他の色（黄・青・赤）などの色が見える人もいる。もちろん、この経験をしない人もいる。全色盲と言っても、一人一人違う視覚世界を体験しているようだ。全色盲の人に、自分の見ている vision が好きかと聞くと、みんな好きだという答えが返ってきた。

2. 教育

2017年現在、エレメンタリースクールに所属する全色盲の児童は二人である。そのうち一人は知的障害を持っているため、特別学級に所属していた。ピングラップ島の小学校では、全色盲の子供専用の特別なクラスはない。学習が遅い子供に対しての特別学級があるが、全色盲の子供は通常の生徒と同じクラスで、全州共通の教育カリキュラムの下で学習していくことになる。はっきりと文字が見えないために、どうしても課題をこなすのが遅くなってしまうため、同じカリキュラムでも時間をたっぷり取る必要がある

るそうだ。また、彼らは黒板の文字がよく見えないので、黒板の目の前に立ってノートに書き写す必要があるそうだ。韓国人の全色盲研究者がかつて片目用の拡大鏡を寄贈していったそうだが、それでは黒板の文字を一文字一文字読むことしかできず、勉強のツールとしては不適切だったそうだ。黒板の前でノートに書き写すのが最も適切だと教師は話していた。

8/24 10:45 頃からと 8/27 8:10 頃から、今年小学校一年生になった全色盲の男児がいるクラスを見学した。他の生徒が別の課題に移っても、彼ともう一人の生徒はまだ一つ前の課題をやっているようだった。課題は A~G までのアルファベットを何回も書いて練習するというものだった。男児は見えづらそうに紙に目を近づけて、一生懸命に課題をこなしていた。そのあと、「color and shape」というテーマの授業も行われた。四角には赤い色を、丸には青い色を、三角には緑色を塗るという課題だ。男児はやはり色の区別がつかないようで、幾つかの方法で課題をこなしていた。①友達が正しい色のクレヨンをも男児に渡してくれる、②とりあえず男児自身で予想したクレヨンを手を持って先生に尋ねる、③間違っただけで塗り始めてから訂正される、④稀に当たる。特に赤色と青は比較的分かるような気もした。緑的中率は低いように思われた。時々男児が全く正解のクレヨンを選ぶことができずハズレばかりを選ぶので、周りの子供が笑っていた（意地悪ではなくて、単にその状況を楽しんでいるという感じで）。そして、見かねた友人が正解の色を男児に渡してあげるのだった。男児もそのことに気分を害する様子もなく、元気に色塗りの課題を先生にチェックしてもらっていた。

彼らは色を実際に見ることはないが、色の名前を英語で覚えさえしてしまえば、Blue と言われれば Blue と書かれたクレヨンを持てばいいし、Red と言われれば Red と書かれたクレヨンを持てばいい。そうやって、学校での色の課題はこなしていけるようであった。

その後 Shape を書く授業もあったが、男児は四角を描くのも他の生徒よりも苦戦していた。多分、視力を上げるためには紙に顔を接近させる必要があるが、その距離だと自分が書いているものの全体を捉えてバランスを保ちながら書くことが難しいのではないかと思われた。また、よく見えないためにペンを少しずつ動かす必要があり、必然的に四角は角が取れて丸に近いものになっていた。何度か他の生徒よりも多く練習を繰り返す中で、やっと、四角に近いものが書けるようになって、本人は非常に喜んでいて。その次に、今度は丸を描く時間になったが、彼の書く丸は、他の生徒と比べて 1/5 くらいの大きさで、非常に小さかった。これも、目を近づけて書くので、視野に収まるサイズの丸を書こうとすると小さくなってしまおうのだと思われた。丸の中に数字を書き込

むという課題であったが、丸の中に数字を書き込むことが困難なほど小さい丸をたくさん描いていた。この男児は、全色盲の母親以上に昼間の羞明が強く、視力が下がるとのことだったので、他の全色盲の子供よりも作業が遅い可能性も考えられた。

[写真]Shapeを描く授業を、紙に目を近づけて熱心にこなしている（左）

彼の描く丸は非常に小さかった（右）



ピンゲラップ島のエレメンタリースクールで教鞭をとる先生によれば、かつての問題はポンペイに行ってからだったそうだ（今は R 氏が全色盲の生徒を始め、視覚障害を持つ児童を支えているため、状況は好転している）。20 年前の様子を以下に記述しておきたい。ポンペイの高校に入学すると、全色盲の生徒は黒板が見えないので黒板の前でノートに書き写すことになる。それを他の生徒がバカにして笑い者にするのだそうだ。それに耐えられない生徒はノートを写すのを止めてしまう。そういう場合は、同じピンゲラップ島出身の正常色覚のクラスメイトが寮に帰ってからノートを見せて助けてあげていたそうだ。しかし、笑い者にされることに絶えられない生徒は、最悪は高校を中退してしまう。そのために、全色盲の生徒のうち高校を卒業できる生徒はほんのわずかだったそうだ。高校を辞めてしまう生徒はピンゲラップ島に帰ってくる。その時に、高校を終えた生徒が自分の教材を中退した生徒に見せて、中退した生徒は残りの学習を島ですることもあったそうだ。（ポンペイ島の全色盲の教育については次項）

3. ピンゲラップ島の全色盲者の不利なこと

全色盲の人たちの生活は他の人と何も変わらない。思い当たる違いがあるとすれば、以下の5点である。(1)バスケットボールが不得手、(2)Kahlek で Front position になれない、(3)素潜り漁 spire fishing が不得手、(4)police になれない、(5)採りごろのココナッツが下からだとわからない。食物の食べごろが見ただけではわからない。

(1)島の男性たちの多くはバスケットボールをやっているが、全色盲の男性の一人を除いて他の男性はバスケットボールができない。また、唯一バスケットボールをやっている

る男性に関しても、他の男性よりも動きが遅いという客観的な評価が見られた。実際、出場回数は他の男性に比べて少ないように思われた。唯一バスケットボールができる男性に関しては、彼は昼間の眩しさでボールが見えないのだと話していた。しかし、夜になるとボールが見えるようになるから問題ないのだという。実際、島のバスケットボールのトーナメントは夜間に行われ、老若男女がバスケットコートに集まって観戦するのが娯楽化している。彼にとっては、最も適した条件下でバスケットボールの試合が行なわれているということである。

(2)伝統的な漁である Kahlek においても、カヌーで最も責任のある front ポジションには就くことができない。Needle fish という尖った口を持つ危険な魚の素早い動きに対応できないからだそうだ。現在の全色盲の男性が担っている役割は、Torch を持つ役目と、Paddling のみである。かつては Back で net を持つ人がいた。Back の net 持ちは、front よりも責任が軽く、座ることも許されている。

(3)素潜り漁では、彼らは他の人よりも魚がよく見えるようだ。しかし、どうしても魚の動きの早さに対応できず、取り逃がしてしまうらしい。他の全色盲の漁師も、これが不得手なのは同じだろうということだった。彼らは自分で取ることができないが、魚の存在をいち早く正常な色覚の人に伝えることはできる。

(4)Police は非常に危険な職業である。ナイフを振りかざして暴れる犯罪者も出てくる。そういった時に、全色盲の人は近視であり、遠くがよく見えないので非常に危険である。また、昼間は羞明でさらに視力が下がる。その視力のために動作も他の人より遅いので、政府は全色盲の人を警察として雇わないという慣習になっている。これは法律にあるわけではなく、慣習としてそうなっているようだった。

(5)ココナツの木はとても背が高く、20m 先から遠くは見えず、15m でやっと輪郭が分かるという彼らにとって、高いところにあるココナツが食べ頃かどうかを見極めることはとても難しい。ある男性は、「登ってから近くで確認し、まだ食べ頃ではない」という動作を7回くらい繰り返すと疲れ果ててしまうという。よって、正常な視力の人に助けてもらうのが効率的だと言っていた。何をすることも正常の色覚の人よりも全色盲は遅いという自覚があるようで、正常な色覚の人と作業すると効率が上がると話していた。また、バナナや bread fruits が主食として食べられているが、熟した黄色いものと未熟な緑色のものがあり、全色盲の人々の多くは、この色の違いを見分けることができないと言っていた（見分けられるという女性も一人いた）。触った時に初めてわかるそうだ。しかし触ればわかることなので、問題にはならない。魚の違いなどは、色で見分けることが困難なので、形や柄で見分けているようだった。すべての魚を見分けられる

と言っていた。客観的には、他の人と何も変わりなくやっているように見える。しかし、当の全色盲者たちにとっては、育児するにも料理するにも、やはり「羞明」が非常に辛い問題だそうだ。そして、色の識別に関わることは不得手である。しかし、それが彼らの自尊心を傷つけたり、何か致命的になることはこの島ではないようである。なぜなら、彼らは自らのハンデを経験で乗り越えてしまっているからだ。

4. 羞明対策

島の全色盲の男性のすべてがサングラスをかけている。しかし女性のうちサングラスを使うのは二人だけである。サングラスをしていない女性になんでサングラスをしないのか聞いてみた。すると、彼女はサングラスが必要だが買えない、というようなことを言っていた。しかしその後、他の全色盲の男性や dispensary の人に聞いてみると、各国のリサーチャーがこの島に来て、その度にサングラスをたくさん置いていくのだそうだ。それなのに、なぜ彼女に行き渡っていないのか、それは誰も知る由もなかった。また別の女性はサングラスを持っているがしていないとのことだった。本人の口からは明確な理由が聞けなかったが、スタイリッシュではないという意識があるのではないかという話で、彼女の旦那さんと意見が一致した。

それゆえに、女性の多くは昼間眩しそうに目を細めて、ゆっくりと活動している。家の中や、キッチンには日陰なので、比較的大きく目を開いて活動することができるが、しかしそれでも、昼と夜では目の大きさが違うと感じた。この島は本当に日差しが強いので、日陰でも、昼間だと周囲の光が反射して目に届いてくるのではないかと思われた。それゆえに、夕方以降～夜になると彼らは正常の人と同じように目を見開いて会話することができる。目を見開くと眼振が強い人が多い印象である。

[写真]木に登りココナッツを採る全色盲の男性（左）

豚の餌用のココナッツを集める全色盲の男性（右）



5. 全色盲者と Kahlek

全色盲者によって Kahlek をどのように受け止めているかは大きく異なる。ある男性は、“Kahlek の Torch は非常に眩しいので直視できない。そのため、海辺でたくさん Torch が燃えている時は、極力下を向いている”ということだった。そして、カヌーに乗る時になると、自分が担当する Torch に向かってまっすぐに歩いて行き、手にするのだそうだ。漁の最中も激しく燃えている Torch は眩しいので目をそらし、炎が弱まると直視することができるという話をする。

一方で別の全色盲の男性は、“炎は非常に眩しいが、しかし美しいので見るのが好きだ”と話す。また、“炎に照らされるとトビウオがそれはそれは美しく、よく見える（白く輝いて見える）”そうで、見るのが好きだと話した。

漁に行く必要のない全色盲の女性にとっては、“Torch が輝く Kahlek はあまりに目に負荷がかかるので見たくないものだ”と話す人が多かった。

Kahlek に行くにはカヌーのオーナーにメンバーとして声をかけてもらう必要があるが、全色盲ということがメンバーの選抜に影響しているということはないようだった。働き者かそうでないかの方が重要である。5人の全色盲の漁師の内、1名だけが怠け者という理由で補欠扱いのことが多いそうだ。もう一人は高校を卒業したばかりで経験が浅い。他の3人に関しては、毎年のように Kahlek に参加しているそうだ。

6. 男たちと漁

男性たちは全色盲の有無に関わらずみんな釣りを得意とし、それは彼らの趣味でもある。全色盲の男性は夜に魚が良く見えるということは正常な色覚の男性たちも知っていることだった。しかし、かといって全色盲の漁師たちは他の漁師と変わらない。全色盲だからたくさん取れるとか、全色盲だから他の漁師よりすぐれているとかいうことも、そこまで事実化していないようだった。実際、差はないのかもしれない。彼らは他の漁師と同じように、ほとんどいつでも好きな時に漁にでる。夜に内海で釣りをすることもあれば、カヌーやボートで昼夜問わず釣りに出ることもある。自分のボートやカヌーを持たない男性は、それらのオーナーに誘われるなどしない限り外海での漁に出れないので、内海でのみ食料の魚を得ることになる。

全色盲の男性にとっては、やはり夜の釣りの方が視力が上がるのでベターではあるそうだ。しかし、食べるものがなければ昼間に漁に行かざるを得ないし、止むを得ない。そうやって昼間の漁をしているうちに、多少の視覚的な不都合も慣れていくのだろう。彼らは“昼間に行こうが夜に行こうが、漁が好きだ”と言っていた。

7. 女性と weaving

女性の weaving についても、全色盲だから上手いとか、島一番とかいうことはないようだった。しかし、オリバー・サックスが「色のない島」で述べていた、ヤシの葉の繊維から出来た糸をカーボンで青く染めて布を織っている全色盲の方には今回は出会えなかったのも、オリバー・サックスの記述とそのまま比較することはできない。正確には、ちょっとした本の読み違えで、全色盲の最高齢である E さんにパンダナスのマットの実演をお願いすることになってしまい、サックスが見た織物の実演の機会を得そびれてしまった。しかし、現在島に暮らす全色盲の女性の年齢を考えると、この E さんしか、その織物ができなかつたろうと予測される。(確かに、サックスが見たやり方で小さな織物を織っている正常色覚の 80 歳の女性は存在していた。) E さんはいつも姪っ子と二人でマットを作っており、姪っ子が次に編み込むためのパンダナスの葉を二枚重ねて、長い一つの帯を作り彼女に手渡すと、彼女は渡されたパンダナスを渡された順番で織り込んでいった。そこには、彼女が色彩の微妙なグラデーションなどに関して何かしら微調整を加える余地はなかった。正常の色覚の人と同じように、大雑把に白と茶を識別し、次に白か茶のどちらが来ればいいのかというところは彼女の裁量で決定しているようだった。

今回島でその工程をきちんと見ることができた織物は、このパンダナスの葉で作るマットの技術とヤシの葉で作るバスケットである。この二つにサックスが見た織物を合わせて、大きく三つのスタイルの織物がピングラップにはあると思われる。完成した二色のパンダナスのマットは日光や懐中電灯の強い光の下では、その柄がぼやけてよく見えなかった。しかし、夜に懐中電灯の弱い光の下で見ると、驚くほどはっきりした白と茶のパターンが浮かび上がった。私が見た E さんは、基本的には日中の太陽の光がある場所(強い太陽光は好まない)での作業を好んでおり、薄暗すぎるところは嫌っていた。これはオリバー・サックスが記述した、島一番の布の織り手が薄暗い部屋で作業していたとの記述とは異なっていた。もしかすると、E さんの視力は老眼も入ってきている年齢であるので、昔よりも光が必要になってきていることも考えられるが、その点は確認できなかった。何れにしても、全色盲の織り手が、“正常の人では目が慣れないと見えにくいくらい暗がり”で作業するという事実は、漁においても料理においても、何においても見当たらなかった。全色盲の人は皆、「太陽光が強すぎるとまぶしくて何も見えないのは事実だが、かといって、光がないと何も見えない。夜にボートで漁に行く時は Flash light が必要だ。ただし、一般の人よりも弱い光でも、暗いところでの視力を発揮できるのはアドバンテージかもしれない」と言っていた。

[写真]全色盲の女性による weaving。姪っ子との共同作業。
(上・中段：白と茶の二色のマット、下段：白一色のマット)



織物の値段は、各織り手が欲しい金額をつけているようだった。Eさんは、母親がつけていた値段から変えていないという。現代であれば、その労働の対価は20ドルに価値するかもしれないが、母親が10ドルで売っていたから変えていない、ということだった。その他、ナノワの奥さん（正常色覚）は一枚5ドル。別の女性は15～20ドルで売ると言っていた。何故他と比べて高いのかを聞くと、自分にとってはその金額が必要な

額だから、だそうだ。

30歳近くなれば、島のほとんどの女性がパンダナスの葉でマットを折ることができるようになってきている。これは全色盲でもそうでない人でも同じである。また同時に、彼女たちはココナツの葉っぱで短時間の間にカゴを編むこともできる（こちらは比較的若年の女性でも既にできるようになっている）。およそ30分～40分もあれば、かご一つを完成させることができる。基本的には親から子に教えられる技術のようだった（今回拝見した全色盲のEさんの母親は正常色覚だったそうだ）。

[写真]ヤシの葉でカゴを編む全色盲の女性（上段）と正常色覚の女性（下段）



8. 全色盲の人のコミュニティ

全色盲の人たちは、ほとんどが親戚である。であるので、全色盲の人のコミュニティを意図的に結成するまでもなく、彼らは一緒に暮らし、家族付き合いをする。また、島の人たちは色覚異常の有無にかかわらず、常に家族同然に助け合って共同作業を行うので、全色盲の人だけのコミュニティのようなものはなく、常に混ざり合っている。

全色盲のある女性に、「全色盲同士の方が親近感が湧くということがあるか」を尋ねると、「変わりはない。みんな同じように好きだ。」という回答が帰ってきた。

9. 差別や偏見

少なくともピングェップ島内では、色覚異常のせいで結婚ができなくなったりするとい

うことはないそうだ（ポンペイでは、色覚異常の男性は結婚しにくいということがありそうだった）。先に述べたように、色覚異常の有無にかかわらず全員が混ざり合って協力しているので、際立った差別や偏見もない。また、ピングラップのシンプルな生活様式が、彼らのハンデキャップを目立たなくしているということはあるだろう。小さい頃から同じことを毎日繰り返す中で、彼らはほとんどのことをできるようになっているし、そういう点で、彼らが差別や偏見を持たれる必然性は薄い。

10. 生活における工夫

生活における色彩的な工夫も特に見られなかった。また、周囲も彼らのために何かわかりやすくなるような色彩の工夫をしている様子もなかった。薬の色を間違えて飲み違えたりする恐れがないか Health Assistant に聞いたが「そんなこと考えたこともなかった」といい、「ある特定の場所にある種の薬を置くようにしていれば、場所で認識できるし、そうしていると思う。わからなければ家族に聞いていると思う」ということだった。確かに、この島では日本的な「一人暮らし」という形態がないし、家に誰かしら他の人が同居しているために、あまり大きな問題にならないのだろうと思われた。また、食べ物も、日本のように梱包されてスーパーに売られているものではなく、野生になっているものなので、全色盲の人のために色彩をコントロールできるという類のものではない。よって、バナナやブレッドフルーツの見分けに関しては、先述したように、彼らが自分で、正しく食べ物を評価する能力（触る、嗅ぐ、舐める）を高めていく必要がある。熟しているかどうかは「触る」、腐っているかどうかは「嗅ぐ」。そしてその能力は、食の変化が少なく、かつこの島での長い生活の中で獲得するには、そこまで困難ではないと考えられた。

[写真]熟した黄色いバナナと未熟な緑のバナナ。全色盲者には見分けが難しい。



1 1. 全色盲の原因に関する全色盲者の自覚について

全色盲者に、全色盲の原因が何であるかと尋ねると、実に様々な回答が返ってきた。ある人は、遺伝の問題だと話した。またある人は、祖先の行いが悪かったことによる curse だと信じていた(オリバー・サックスも記述していた伝道師の伝説の内容だった)。またある人は、(遺伝子の問題だと心のどこかで思いながらも) God が自らに与えた運命だと言った。

ポンペイ島の小・中・高校では現在、視覚障害を持つ子供に対する教育がかなり発展していて、全色盲の子供がいる場合は、全校生徒・教師などに向けて、彼らへの適切な配慮に関する説明会が行われている。ピングラップ島の子供も高校からはポンペイ島に渡るので、同じ機会を得ることになる。しかし、そこで全色盲に関する医学的な説明は行われなため、全色盲である本人たちが医学的な原因を知る機会はほとんどないと思われた。また、本人たちも、そこまで医学的な原因に関心を寄せたことがない人が多いようだった。全色盲のある男性には、「この病気は日本にもあるのか？ピングラップ島だけだと思っていた」と言われた。またある全色盲の女性には「色盲っていろんな種類があるの？知らなかった。自分がどのタイプの色盲だったかは、小学生の時にポンペイで検査を受けたけど忘れてしまった」と言われた。

彼らと生活を共にする正常な色覚の住民(小学校の教員)には、「これだけいろんな研究者が島に来ているのに、治療法はまだ分かってないのか？」と聞かれた。遺伝子の問題であるので、近親婚をやめるしか方法がないということをお話すと納得したようだった。ゴーストの呪いであるとか、祖先の行いに対しての curse であるという認識の当事者は少ないようだが、医学的に正確な説明をできる人も非常に少ないと思われた。

1 2. K 青年の夢

全色盲の K 青年(20 歳)はポンペイでの暮らしよりもピングラップでの暮らしが好きだと話す。なぜなら、この島にはやることがたくさんあるからだそう。ポンペイでは、学校に行って、食べて寝るだけ。でも、ここでは豚の世話をしたり、ココナッツをとったり、漁に行ったり、カヌーを彫ったり、やることがたくさんあるから好きだそう。そして何より、この島が my home だから帰ってきたいと話す。

K は今、5 匹の豚と、3 匹の子豚を育てているそう。これを売ってポンペイの college に行き、college で agriculture の専門を終えたいという。そしていつの日か、この島で market を開きたいのだそう。その market では豚、鶏、魚、他にもブレッドフルーツなどの local food を売りたいと話す。私が、住民は助け合っているし、自分で採れると

思うけど Market のニーズはあるのかな？と聞くと、「あると思う！」と確信に満ちた様子で答えてくれた。今の時点でも、時々魚を購入したい島民、local food を購入したい島民がいるそうだ。

大学のすべての学期を終えるには 300 ドルがあれば十分だそうだ。今いる豚を全部売れば 500 ドルになるというのが K の見積もりである (1.75 ドル/1 パ운드)。

ポンペイ島で全色盲に対して偏見がないかどうかという質問には、「ない」と答えた。僕が親切だから、みんな自分に親切にしてくれるよ、と K は笑う。ポンペイ人よりも、ポンペイに住むフィリピン人がたまに良くないことを言ったり、良くない振る舞いをするから困るということを書いていた。しかしそれも、自分に対して何かされたということではないようだった。全色盲への偏見や差別というものは、私が心配していたほど、現在では強いものではないのかもしれない。

13. 総括

①**ピングラップ島の全色盲者のハンデキャップについて**だが、ピングラップ島では当事者もコミュニティの人々も、全色盲者のハンデキャップについてそこまで自覚的ではなかった。強いて言うならば、昼間の太陽の下だと仕事が遅いこと、バスケットボールができないことくらいであった。ピングラップ島では車を運転する必要がないので、彼らが運転「できない」、「ライセンスが得られない」という disabled な部分に焦点が当たりにくい。

②**ハンデキャップを生かすことができる社会環境、自然環境**という点に関しては、「生かす」ことができているとは言えなかったが、釣りを得意とし、好きだという意識がある中で、これがこの島の生業である点は、彼らのディスアドバンテージをノーマルなところまで引き上げることはなっているようだった。彼らは夜であれば、他の人よりも視覚が優れるので、どこに魚がいるか、正常な色覚の人に教えることもたまにはあると話す。都会と比較して、シンプルで変化の少ない生活の中では「できない」ことは非常に少なくなっていくのだと気づかされた。

ピングラップ島以外の地域や国の全色盲の人においては、信号が「見えない」こと、「運転できない」こと、作業が「遅い」ことは生活上・職業上の問題になる。急速に変化する情報システムや工業製品の変化への対応、効率化を追求した迅速な仕事求められる現代社会は、全色盲や視覚障害を持つ人にとって常に迅速な適応を要求される過酷な社会であるように思われた。しかしこの島では、すべてがゆっくり進んでいくので「遅い」ことは問題にならないし（むしろ忙しいことの方が良くないとされると言ってもいい

い)、見えないことは、幼い頃から仕事内容が変わらないという「単調さ」という点でかなりカバーされている。

差別や偏見も、障害が顕在化しにくい環境のせい、この島にはほぼ存在しない。むしろ、高校を卒業して政府ではたらいた経験のある全色盲の男性は、高校を卒業していない他の島民や就労経験のない島民を見下している傾向があり、嫌われていた。

III. ポンペイ島の全色盲

1. R 氏；政府教育部門 special education program, specialist について

1-1. R 氏の功績

ポンペイ島には二つのピングラップ島のコミュニティーが二つ存在する。一つは Mand(人口約 300~400)でもう一つは Malok(人口約 500~700)というところである。Mwalok には約 9 人の全色盲者がいた。Mand は約 29 人であった。そのうちの 4 人はコロニアというポンペイの中心地に暮らしていた(R 氏の Family)。人口が少ない Mand の方が全色盲者が多いのは、ポンペイ島の全色盲者の歴史は Mand から始まっているためである。

私は R 氏という全色盲の男性に出会った。彼はポンペイ島の Mand で生まれ、両親がピングラップ島の出身者である。彼の父親と祖父も全色盲であった。彼の父親は、全色盲でありながら大学の経営専攻を卒業し、かつ政府に就職した初めての人でもあるそうだ。高校の Supply technician (Supply office に属し、生徒に必要な物品を教師に配給する役目)として働いていたという。R 氏兄弟には 3 人の全色盲がいる。そのうち二人は長男と次男で教師をしている。もう 1 人は 31 歳の末娘にあたる三女で、20 歳で第一子を出産し、すでに 3 人の子供がいる。三女の夫は正常色覚だが、3 人の子供は全色盲である。

R 氏自身は政府の Education 部門の Special education program に specialist として従事しており、主に視覚障害を持つ子供の教育を行っている。Special education program 自体は、精神疾患から身体障害、全盲者や全色盲まで、およそ 40 種類の障害を対象にしたサポートだそうだ。このプログラムでは学校での学習サポートだけでなく、高校卒業と同時に三ヶ月の就労の機会が与えられるという就労支援付きのプログラムであり、一般の生徒から羨まれるくらい待遇がいい。R 氏はその中で全盲を含めた視覚障害者全般をサポートしており、視覚障害のある生徒がいる学校に出向き、教師に対して生徒にどう教育をおこなうべきか、実演を織り交ぜながらアドバイスを与えているということ

だった。彼のスペシャリティは“点字が読める”ということであり、それができる人物はこの島で彼しかいない。1999年、R氏はJICAの支援のもと日本でトレーニングを受けている。視覚障害者（全盲を含む）を支援する方法を日本で学んだそうだ。スペシャリティである点字もこの時に日本で学んだという。

R氏がSpecial education programで働くようになってから、そのプログラムもかなり改善されているようだった。しかし、1985年頃にアメリカから導入されたプログラムでありながら、そのプログラムの内容の一部しかまだ実践できていない状況だという。教師に指導しても、それを教師が100%実践してくれるかどうかは別の問題であり、また、実践されなかったとしても、両親も「ここはポンペイだから仕方ないね」と諦めてしまうため問題にならないのだそうだ。日本やアメリカであれば、教育プログラムが100%履行されていなければ学校と親サイドで問題になるが、それがないことが教育水準を下げているとR氏は考えているようである。“親は教育に対して文句を言う権利がある”ということをR氏は伝えたいと言っていた。日本ではモンスターペアレントが問題になる時代だが、それとは真逆であることは非常に興味深かった。何事も、行き過ぎはよくないが、かといってある一定の水準に達していないこともまた問題である。（しかしどうも、障害のない子供の親に関しては、日本と同様にモンスターペアレントが多いそうで、刀を持って教師に押しかけてくる親もいたそうだ。）

1999年頃までは、Special education programに参加している生徒たちに対する差別用語も存在したという。彼らはみんなサポートの一環として黄色いスクールバスを利用していたが、それに由来して彼らを「yellow bus student (=crazy student)」と笑い者にしていた時代があったのだそうだ。しかしそれは人権の侵害ということで、1999年頃に法律として、この言葉を使った人は刑罰に処されるとの決まりができたそうだ。それ以降、バスの色も黄色だけでなくシルバーなども取り入れられ、差別を無くそうという動きは高まったという。

R氏が高校生の時代は、全色盲への差別や偏見が激しい時代だった。その時代の最中で、彼はSpecial education programではなく普通の生徒と同じプログラムの中で学校を終えている。そして現在は修士課程（オンラインのマサチューセッツ大学）を終えようとしており、博士課程を射程に入れている。そんな彼は全色盲者の中ではちょっとした伝説的な存在であり、ピングラップ島の全色盲者の多くが、R氏を尊敬していた。彼を“その時代の全色盲者の Survivor だ”と表現する人もいた。彼は全色盲であることにアドバンテージは感じないと話した。しかし、disableな部分をなんとか克服していくために、常に能動的に動いていたことは、彼にたくさんのメリットをもたらしたと語る。

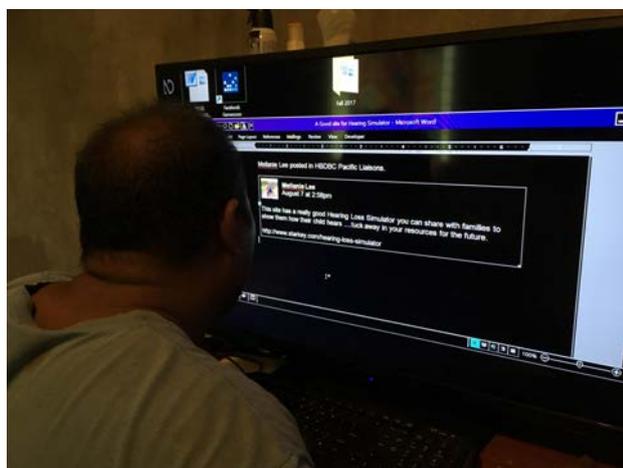
例えば、黒板の前に立ってノートを取ることは、他の生徒からからかわれるし、他の生徒の視線の妨げになるので、文句を言われることも多かったそうだ。しかし、それで言い負かされいては自分を高めていくことができなくなる。彼は周囲の声を気にしないで、自分も他の学生と同じように教育を受ける権利があると信じ、自分の見えやすいやり方で授業を受け続けたから今がある、という。

R氏は視覚障害のために車の運転ができないという。法律で禁止されているわけではなく、自粛しているということだった。よって、他の全色盲者の中には、事故を起こしながらも運転を続けている人もいるそうだ。しかしR氏は、運転を続けている全色盲者にかなり懐疑的で、自粛すべきという意見を持っているようだった。そういった危険な全色盲者のドライバーもいるため、彼は自分の全色盲の姪と甥が学校に通う時は、両親が車で送迎することを勧めているという。全色盲者同士は、遠距離では互いがよく見えないので、互いが近づいた時には手遅れになるからだ。

1-2. R氏の家

R氏の家は大きなPCのディスプレイとwifiを完備していた。家の照明の明るさなどは特に調整しておらず、買ってきたものをそのまま取り付けているということだった。10年ほど前に建築を開始したというお宅はまだ建設中で、少々木や石が混み合って足場の悪い緩やかな登り道の上にあったが、それも問題にはならないようだった。

一番特徴的だったのは、彼の使うPCの画面である。白黒反転しており、背景が黒、文字が白になっていた。こうすることで非常に見えやすくなるという。また、画面が非常に大きく、ワードソフトなどを普通のパソコンの5倍はあるのではないかというサイズに拡大して使用していた。こうすることで見やすくなるのだろうが、不都合もありそうだった。例えば、Wordで英文を打ち込んで、スペルミスがあった時、Wordはスペルミスを教えてくれるが、それが黒いバックグラウンドに赤いアンダーラインで示されるので見えなかった。奥さんが、その赤線の部分を指摘して修正を行っていた。ワードファイルを作成してチェックをする時は、いつも奥さんが手伝っているようだった。



2. 全色盲児童の様子

2-1. Mandのエレメンタリースクールの様子

8月31日、Mandの小学校を訪問した。この学校ではR氏の全色盲のお兄さんが1、2年生に算数を教えている。1年生（男子）、2年生（男子）、3年生（女子）に各1名ずつ全色盲の子供がいた。どのクラスでも、全色盲の子は最前列に座って授業を受けていた。始めに見た3年生のクラスはscienceだった。彼女は大きくて分厚いscienceの教科書を重たそうに持ち上げて目に近づけながら読んでいた。教室の後ろには生徒が描いた絵が飾られており、唯一、緑色だけで書かれた絵が彼女のものだった。それは所々、緑の濃淡で表現されており、これを白黒に変換すると、きっと彼女が見ている世界の陰影が見えるのではないかと想像した。

[写真]全色盲の女生徒のドローイング（左）、正常色覚の生徒のドローイング（右）



次に2年生のクラスを訪れた。彼らは全色盲のR氏のお兄さんから算数の授業を受けていた。全色盲のお兄さんは白いチョークだけを使っており、これは全色盲の児童とお兄さんにとって最適な条件であるとのことだった。「他の児童にとってはカラーがある方が魅力的でわかりやすいのではないか」という質問に対しては、「全色盲の人の条件に合わせている」、という風だった。全色盲の人は黒板に赤やオレンジのチョークで書いても見えないのだ。

[写真]全色盲の算数の先生の授業



最後に 1 年生のクラスを訪れた。ちょうど、フルーツの絵に色塗りをする授業だった。他の生徒が熱心に取り組む中で、全色盲の児童は眠たく退屈そうだった。R 氏曰く、色の授業に関心を持ってない子供は多いようだ。一方で、R 氏は非常に論理的に、真理を追究したい人なので、色の授業は興味深かったという。先生に葉っぱが Green だと教えられた後、葉っぱの絵を書いて Green のクレヨンで塗るという作業に全く違和感を感じることはなかったようだ。どちらかというところ、「正解の色」を塗っていくという作業が楽しかったようである。

[写真]気が乗らない様子で、渡された紫のクレヨンでぶどうの絵を紫色に塗り始めた



2-2. コロニアのハイスクールにおける生徒の様子

コロニアのハイスクールには男女 2 名の全色盲者がいた。一人は Mwalok 出身者で、もう一人はモキール出身（うろ覚えだが、ピングラップ島から来た子供ではなかった）という話だった。2 名とも、Grade9 に属しており、これはハイスクールの 1 年生にあたる。また、2 名とも、Slow class に所属していた。Slow class は、読み書きが遅い子供、学習が遅い子供、集中力がない子供、無気力な子供などが参加するクラスである。全色盲の生徒が必ずしも Slow class に入るという決まりはなく、クラス決めのテストの成績で公正にクラス分けをしているということだった。しかし、slow class の中でも、この全色盲の女生徒の成績は非常に良いと先生は言っていた。

9/4 の 8:45~9:45 まで、生物の授業を見学した。Slow class は 21 人の生徒がいるが、この日、全色盲の男児は欠席していた。女生徒はクラスの廊下側の前から二番目の席に座っていた。先生によれば、この女生徒は決して前の席には座らずに、前から二番目の定位置が空いていない場合は、さらに後ろの席に座る習慣があるという。また、隣には仲良しの女の子がいつも座っており、女生徒がわからないことがあると、その女の子が助けてあげているそうだ。仲良しの友人は、女生徒を助けることが好きだという。授業

が始まる前の時間、彼女はクラスメイトの男子とふざけ合っていたが、その際に男子生徒が彼女の全色盲特有の「羞明からくる激しい瞬きの真似」をしており、彼女は笑いながらではあるが男子をたたき返していた。いじめという類のものではないが、全色盲の児童が「瞬きをからかわれる」ということは少なくないことなのだろうと思われた。というのも、この島では多くの人が全色盲の人のことを表現するときに、この瞬きの動作を真似するからだ。

授業が始まる前に、黒板には細かな文字でたくさんの文章が書かれており、それは全色盲の学生には到底見えないと思われるサイズだった。先生は自分が授業に使っているテキストを女生徒に渡し、それをノートに書き写すように促していた。普段は、全色盲の生徒2名用に、ハンドアウトをプリントして配っているそうだが、この日は用意がなかったというようなことを言っていた。また、先生用のテキストに書かれた内容の板書の他に、そのテキストに対して先生が5つの問題を作成し、新たに板書していたが、板書を終わると、先生は板書した質問と同じものを白いコピー用紙に手書きで書き写して、それを女生徒に渡していた。先生は、いつもこのようにしていると言っていた。他の生徒は自分でノートに書き写していた。板書した後に、先生がさらに全色盲の生徒用に書き写すというのは少し効率的ではない気もしたが、全色盲の生徒にとっては非常に親切な対応であると感じた。日本の教育現場での授業の進行速度を考えると、日本では決して採用できない方法だと思った。

3. ポンペイ島における全色盲者の就労状況

ポンペイ島において就労している全色盲の成人は8人である。ピングラップ島から出てきてポンペイで働いていた経験のある全色盲の成人はR氏が記憶する範囲では3人しかいないようだ。そのほか多くの全色盲の人はアメリカに渡り、アメリカで就労している。

ポンペイに残った全色盲の人々の多くは高校の Special education Program に参加し、学校内での学習支援と卒業後3か月間の就労トレーニングを受けることができる。そして就労トレーニングで、そのトレーニング先に気に入られることができれば正式に雇用されるシステムだという。就労先は14歳の段階で、高校で選択したそれぞれの興味に従って検討され、その時に job opening があるものの中から興味に最も近い職業が割り当てられる。よって、政府とプライベートセクターであれば政府の仕事の方が給料はいいが、興味を重要視する場合は必ずしも給料がいい職業になるとは限らない。非常にいいシステムに思えるが、現在までのところ、多くの人はそのトレーニング期間で採用さ

れることなくリタイアし、家庭内の内職に従事するか、カレッジに行く場合もあるが、多くはリタイアしている状況だという。それはお金が原因ではないだろうということだった。何故なら FSM はアメリカの資金援助の下にあり、教育にはかなりのお金が注がれているため、大学でまじめに学業を取めると、支払った学費の何倍ものお金が学生に支払われるのだそう。一学期の学費が 50 ドルだというのが、リファウンドで得られる金額は 500 ドルにも及ぶとも聞いた（すべての学期の総計か、1 学期でのリファウンドかは定かではない）。多分、就学における物的・人的学習援助がないために学業を継続できないことが大きな理由として考えられた。就職も就学もしない全色盲の人は、女性であれば家でハンドクラフトを作ってコツコツお金を稼ぐか、男性であれば、お金に困るとプライベートワーク（単発で個人から頼まれた仕事をして日給を稼ぐスタイル）をしながら、その日暮らしをするのが一般的なのだそう。もしくは、アメリカにいる家族からの仕送りを頼りにする。R 氏の一家曰く、就職できないのは彼らが障害を持っているせいではなく、彼らの考え方や人生の選択の問題だという。実際、Robert 一家の全色盲の男兄弟はみんな教師として就職しているし（末娘は高校を中退したので、就職が難しいが）、今回ピングラップで出会った全色盲の男性のうち二人は、高校を卒業した後、政府の建築部門に就職して働いていたという。しかし、二人ともそれぞれ別の理由でクビになってしまった。一人は怠け癖があるせいで。もう一人は窃盗を働いてしまったせいで。R 氏は今でも、彼がなぜ窃盗を働いたのか不思議でならないという。「全色盲の場合は遠くが見えないので、自分の窃盗を誰かに見られているかどうかについて判断できず、あまりにリスクだ」というのだ。「ましてや彼の窃盗品は大きな袋に入れており、それを倉庫から盗み出すのはあまりに無謀だ」と。そして、全色盲の人など、障害を持つ人は一様に謙虚な人が多いので、彼に何が起こったのか、自分の身に置き換えると全く理解できないと R 氏は言う。

R 氏の全色盲の妹の J さんは、現在いとこからのお願いで、平日の朝 8 時から午後 5 時まで、ベビーシッターをしている。当初は生まれたばかりの赤ちゃんの世話だけだったので、2 週間で 80 ドルが支払われたというが、その後 6 歳の子供の世話が午後から加わった為、2 週間で 125 ドルに値上がりしたそう。時には 140 ドルを支払ってもらったこともあるといい、支払額に不満はなさそうだった。ただ、J さんは自分の三人の子供もいる為、本当は働きたくないのだという。何度も辞めたいと申し出たそうだが、「あなたしかいないの」と懇願され、お母さんからは「子供たちの世話は私がするから従兄弟を助けてやりなさい」と言われ、半ば渋々シッターをしているということだった。

そういったわけで、現在、ポンペイ島の全色盲で被雇用者として定職がある人は以下

[表5]である。R氏の血縁関係者が多いのが気にかかった。政府の下で給料の良い職に就くためには高校を卒業している必要があり、障害を乗り越えていくたくましい精神力と自信がなくてはならない。また、情報収集を行い、正しく必要な情報を手に入れるネットワークの軽さなども必要だろう。それは多分、学校や家庭内の教育の中で培われていく部分も大きく、R氏の家族に就職できた人が多かったことは偶然ではないと思われる。R氏の父親も全色盲だったが、高校の時にピングラップからポンペイに出てきて、大学卒業後は政府の下、学校の Supply technician として働いていた。つまり、R氏の兄弟には身近にロールモデルがあり、教育現場に精通する人物がおり、「学外教育」という点でも、環境が整っていたと考えられる。

[表5] ポンペイ島の全色盲者の就労状況（氏名は匿名で表記する）

職名	人名	性別・年齢	出身地
政府の教育部門/政府	R氏	M・41	Mand, Pohnpei
中学校の先生（全教科）/政府	R氏の兄弟	M・46	Mand, Pohnpei
小学校の算数の先生/政府	R氏の兄弟	M・44	Mand, Pohnpei
栄養士（政府とともに予防医学的な活動している）/政府	R氏の叔母さん	F・58	Mand, Pohnpei
Hardware store 販売員	R氏の従姉妹の息子	M・21	Mand, Pohnpei
Fishery cooperation	Iさん	M・28	Pingelap
Night time Security man (A one supermarket)	Jさん	M・38	Mand, Pohnpei
Night time Security man (A one Mwalok)	Dさん	M・34	Mwalok, Pohnpei
Cook for private business	Lさん	F・47?	Mwalok, Pohnpei

日本大使館が発行している「ミクロネシア連邦概況 2016年7月版」によれば、労働力人口の半分以下しか被雇用者として働いておらず、その他の人は自給自足か小売業であることがわかる。しかし、島の人の感覚としては、自給自足やプライベートワークで生きていくというライフスタイルは決して一般的ではなく、やはりどこかに雇用されているというのが一般的という認識ではあるようだ。

労働人口(2010年)

労働年齢人口(15歳以上)	66,146
労働力人口	37,919
被雇用者	15,131
自給自足活動従事者(小規模販売含)	16,658
失業者	6,130

現在、全色盲でありながら政府の下で働いている人は4人しかいない。全色盲の栄養士であるHさんも友人は全色盲者の就労状況の悪さを懸念し、全色盲の友人を励ましたり、講演会をしたり、いろいろと努力してきたそうだが、全色盲者の就労率は依然低いままである。彼女は、就労しない全色盲者は、障害に引け目を感じているのではないかと推測した。私が「彼らを励まし、精神的なケアまでを含めた教育が行き届いていれば、就労率は上がるのではないかと」とHさんとR氏に聞くと、その通りだが、今のところ視覚障害者を対象にした教育の普及活動をしている専門家はR氏だけであり、部下を二人育成中だが、3人ではすべての全色盲の子供まで手が回らないのが現実だという。また、これ以上の教育拡張を試みるには支援金が必要であり、それをどこからどのように持ってくるかということが問題だということだった。

4. 全色盲児童の教育に必要な物品

ポンペイ島の視覚障害者教育の現場で特に不足していると感じるものは、全色盲の子供の教育における物資の支援であるとR氏は言う。全色盲の子供は視力が弱く、近視であるため、遠くの黒板は見えないし、教科書は目に近づけて読む必要がある。拡大鏡があればいいが、そういった物資の支援が足りないそうだ。教育現場で有用だと思われる器具は以下の3つだそうだ。①拡大鏡、②単眼鏡、③CCTV。

JICAで来日した時のつながりで、かつては日本人とコンタクトを取ることができ、日本の視覚障害教育の補助物品のうち余剰分を送ってもらっていたという。今は日本人の連絡先をなくしてしまったので、アメリカからのサポートを受けているそうだ。今回の出会いを機に、また日本から支援できることがあればしようという会話を交わした。

5. ポンペイで生まれ、ポンペイで働く全色盲の人のインタビュー

5-1. Hさん(F・58歳・栄養士・Mand生まれポンペイ育ち・既婚)のインタビュー

彼女は grade9 (高校一年生) の時に股関節を悪くした。全色盲であったこともあり、彼女の両親は復学をさせなかった。しかし、その間にも彼女の同級生は大学に進学し、どんどんキャリアアップしていった。「私も彼らも同じはずなのに、どうして自分だけが家にこもって、洋服を洗って、料理をして、両親に1ドルを乞うて生活しているのだろう」。Hさんはどんどん自分の立場に苦痛を感じるようになっていた。結果として6年間ハイスクールを離れていたが、彼女は親を説得して高校に戻り、卒業後はパラオにある Micronesian occupation college で栄養士の専門をとった。その後、ちょうど COM(College of Micronesia)で、今まで30年間栄養士として携わっているアメリカのプロジェクトのメンバー募集があった。当時の彼女は本当に自信がなく、自分の障害に引け目を感じていたという。しかし、旦那さんが彼女を励ましたそう。自信がないながらも臨んだ面接で彼女は運よく採用された。それ以来、彼女はミクロネシアのあらゆる地域に介入して、NCDの減少を目指して取り組んでいる。

第二次世界大戦前までは FSM 地域での NCD はなかったそうだが、戦後、徐々に増え始め、1990年から激増したという。ポンペイでは、“痩せている人は食べる物がないひもじい人だ”という誤認もあるようで、そういった考えを是正していく必要があると感じているそう。皮肉なことに、彼女の父親は高血圧、母親は糖尿病でなくなったという。自分がもう少し早く予防医学の活動に目覚めていれば、両親を救えたかもしれないと、彼女は悔しげな様子で話した。

唯一“できない”という意識があることは、車の運転だという。最初はパソコンもできず、与えられた仕事がこなせるか不安で不安で眠れない日々もあったそうだが(思い出しても涙が出るほど辛い日々だったそう)、人に聞いて努力したおかげで、今ではパソコン作業もこなせるようになり、ほとんどノーマルな人と変わらない仕事ができるそう。食べ物や食品などの色も、わからなければ家族に聞き、メモしておくことで次からはその色が分かるから問題ないという。また、確かにバナナの完熟・未熟はわからないが、これは触れば経験として分かるから問題ないとのことだった。色がわからないことが栄養士の仕事にマイナスになっているということはないようであった。

Hさんは10歳の時に、当時25歳のR氏の父らと共に、アメリカ人の全色盲研究者に連れられてアメリカに渡ったそう。1969年のことだったという。その時にアメリカ人研究者に言われたことが、「この病気を治す方法はないが、ピンゲラップ人同士での結婚をしなければ、子供は全色盲にはならない。全色盲をなくしたければ、ピンゲラップ人同士での結婚をやめなさい。」と言われたそう。それを守ったのかどうかはわからないが、Hさんはチューク出身の男性と結婚し、今のところ子供や孫に全色盲はい

ない。

アメリカでの生活とピンゲラップでの生活を比較して、どちらが暮らしやすいかが気になっている、ということをお話すと、彼女も R 氏も「それはアメリカに違いない。ミクロネシアを出た方が、視覚障害者へのサポートがしっかりしている」という意見だった。確かにそういう考え方もある。特に、資本を持った組織に就職をしてお金を稼ぐということを前提とすれば、確かにそうかもしれない。しかし、この二人は、ピンゲラップ島で育ってはいないので、あの島の全色盲の暮らしを知らない。私の中では、ピンゲラップ島出身者と比較すると、きっと違う回答が返ってくるのではないかと思えて仕方がないのだった。

5-2. M さん (M・21 歳・Pohnpei Hardware 販売員・Mand 生まれポンペイ育ち・既婚)

高校を卒業した後、彼はカレッジの入学試験に合格していたものの、OJT B という 3 か月の職業トレーニングに参加し、そして念願の Hardware store での就職が決まったため、カレッジの入学を蹴ったそうだ。就職活動の際に、全色盲であることを話したが、それは全く問題にならなかったという。「君が働きたいなら決まりだよ」という風だったそうだ。差別や偏見はないと彼は語った。また、Hardware store を就職先に選んだのは、彼が電気器具などに興味があり、もっと知りたかったからだそうだ。つまり、やりたい仕事につけたというわけである。

同世代の全色盲の人はどうしているのかを聞いてみると、26 歳で Mand に住んでいる男性が一人いるらしいが、彼は辺りを徘徊しているだけで、定職にはついておらず、なおかつ喧嘩や窃盗を繰り返してかなり周囲に迷惑をかけているらしい。その彼は、両親がもう亡くなっており、プライベートジョブでお金を得ている状況だという。彼が働きたくないのか、働けないのかについて聞いてみると、自分の場合と比較して、働きたいと思えば働けるはずだから、彼のことはよく分からない、と言った。

M さんに、叔父である R 氏らがロールモデルになりえたかどうかを聞いてみると「yes」という返事が返ってきた。「自分は R 氏のように修士課程は持っていないけれど、ロールモデルにはなった」という。やはり、全色盲でありながら働いている人を間近に見てきたかどうかは、その人の就労に対する価値観を形成するのではないかと思われた。

また、M さんは「日本だったらこの全色盲は治せるのか？」と聞いてきた。遺伝の問題だから無理だと話すと少し残念そうだった。眩しいと眼振もあるため、それが特に気になっているという。彼が眼振のことを英語で「Face problem」と表現していたのが印

象的だった。それは、主観的な症状よりも、客観的にどう見えているかというところに焦点を当てているようにも感じられ、まだ若い青年にとっては、非常に気がかりなのかもしれないと想像した。

5-3. Jさん (M・38歳・Security man at A one supermarket・Mand生まれポンペイ育ち・既婚)

彼は Mand 生まれであり、母親に全色盲を持つ。兄弟では彼だけが全色盲であり、下に二人の兄弟がいるということだった。彼の全色盲の母親は、話を聞く限り、全色盲であることをかなり悲観的に捉えており、彼が働くことについて、その困難な部分にばかりフォーカスしていたことがうかがわれた。例えば 1998 年頃からの 4 年間、全色盲者などの障害者を支援するプログラムが他国から入ってきたのだそうだ。それは、全色盲者に冷蔵庫やボートを無償で与えるというものだったそうだ。その時に、彼の母親が選んだものは冷蔵庫だったそうだ。(冷蔵庫があれば、氷を作って販売して収入を得ることができるそうだ。)しかし、彼にとって本当に必要だったのはボートだった。「お母さん、僕らはボートが必要なのに、なぜ冷蔵庫を選んだの?!」と彼が問い詰めると、母親は「あなたがボートを得ても、魚を取ることはできない。強い日差しの下で働くことはできないでしょう」と言われたのだそうだ。ピングラップであれば、そんな教育がされることなど有りえないだろうが、彼は Mand で育ったので、母親の価値観はそうだったのであろう。彼の母はまだ幼い時代の彼に「いつか今よりも年をとったら、あなたはもっと目が見えなくなってしまう。でもそれは神の定めであって、私たち親が決めたことではないの。」と教えたそうだ。当時の彼は、その言葉に強烈な不安を感じたという。

彼の家を訪れて、彼の家縁側で“彼が全色盲で、親戚にロールモデルがないにも関わらず、唯一ポンペイで就労している人なのはどうか。どうしてあなたは、家族のためにお金を稼ぐという発想になったのだろうか”ということについてインタビューをしていると、突然若い男性が割り込んできて「Are you kidding me?」と言い出した。どうやら、J の妻 (ポンペイ出身) の姉妹の子供のようで、「こいつが家族全員の世話をしているだっけ? 笑わせないでくれよ。この人が世話しているのはこの人の妻だけだよ。俺たちはポンペイ生まれポンペイ育ちだけど、こいつはピングラップから来たんだよ」と激昂してきた。どうやら少し酔っ払ってはいるようだったが、家族仲が良くない事は一目瞭然だった。また、酔っ払っているとはいえ「ピングラップ人が嫌いなんですか?」と聞くと「嫌いだね、あいつらは嘘をつくし〜〜」という調子で、批判が止まなかった。Jさんは「申し訳ないけど場所を移そう」と提案してきたので、私たちは彼の職場の近

くの公園に移動した。

どうも、Jさんはポンペイ出身の妻と結婚したが、彼女の家族は彼を受け入れてくれないそうなのだ。彼は肩身がせまいそうで、妻とは離婚も考えているという。妻は自分をサポートしてくれるが、家族との関係があまりに悪いので離婚を考えざるを得ないようだ。結婚してからは6年だそうだ。彼は何度もなんども、「自分をサポートしてくれる伴侶を探さないとこの先が辛い。昔はよく見えたものも、老化で視力が下がってきている。50歳~60歳になる頃には、きっとほとんど見えなくなるに違いない。だから自分には自分を支えてくれる人が心から必要なんだ。それが僕が最も主張したい叫びだ」と彼は繰り返した。

彼は中学を卒業後、いろんな仕事にトライしてきたそうだ。まず初めに、政府の建設部門で1年働いたという。しかし、それは日中の太陽の下での作業で、しかも彼らはストイックに仕事を要求してきたため、非常にハードだったそうだ。そして1年の契約が切れた後、政府から契約更新の連絡は来なかったという。その後、洋服店での販売業務などを経て、2003年から現在まで、A one suparmart というところで夜間の警備員をしている。給料は最低賃金の時給 1.75 ドルだという。昼間の羞明が辛い彼にとっては、これは非常に良い職業ではあるが、やはりもう少し給料が高い職を探したいと思っているそうだ。

彼はオーストラリアや世界各国からやってくるリサーチャーにかなり懐疑的で、今まで搾取ばかりされてきたという思いをもっているようだった。研究者が論文を書いて成功するために搾取され、彼らが島を去った後に、自分に何かの利益もたらされたことは一度もなかったと彼は言った。また、彼は昨今の自身の視力低下をかなり深刻に捉えているようで、それを改善する方法や治療法が日本にないのかと聞いてきた。わたしは全色盲者の近視を治すメガネがあるのかなどの知識はなかったので、彼にポンペイ州立病院に行ってはどうかと勧めた。すると彼は信じがたい話を話し始めた。昔、アラスカから来た眼科医がいたそうで、彼の親戚である全色盲のピンゲラップ人がその医者にかかったという。しかし、その医者手術は失敗して、彼の目は術前よりも見えなくなったそうだ。彼は手術の後にピンゲラップに帰ったが、目が見えなくなって一人言をぶつぶつと話すようになった。そして手術から三ヶ月後に、首をつって自殺したというのだ。この話の真偽を確かめるべく R 氏やピンゲラップ在住の O さんに確認したが、彼らは知らないと話した。多分なにかの話に尾ひれがついて膨らんでしまった可能性が高い。しかし、これが理由で病院にかかりたくないと思っている全色盲者が J さんの他にもいるとしたら問題である。

彼は全色盲の由来についても話してくれた。スペイン人の宣教師がモキール島に行った時に、何かの理由で島の人がある宣教師の目をくり抜いて彼を海に沈めた。その宣教師に関わる呪いで全色盲が発症してしまったために、モキールとピングラップコミュニティーにだけ全色盲がいる、という認識だそうだ。

5-4. Dさん (M・34歳・security guard at A one Mwalok・Mwalok 育ち・独身)

Dさんはポンペイの高校卒業後にグアムにわたり6年間グアムのスーパーマーケットで棚に品物を並べる仕事をしていたという。その後、長いことグアムにいたため親戚を訪ねたいと思い、今は一時的にポンペイにいる状況だという。お金が貯まり次第、グアムのカレッジに入学して、将来的にはポンペイの高校で教師として全色盲の生徒の指導をしたいという夢があるらしい。警備員として働き始めてもう一年近く経つといい、あと2~4か月もすれば、大学に入学するためのお金が貯まると言っていた。

グアムとポンペイの暮らしはどちらが好きかと尋ねると、「グアム」だと答えた。ポンペイの暮らしは座ったり話したりするばかりで退屈だそうだ。グアムは毎日働いたり、することがたくさんあったから良かったと話す。

仕事を得る上で全色盲は問題にならないと彼はいう。グアムでも問題ではなかったそうだ。唯一、強い日差しだけが辛いので、室内や直射日光が遮断されている場所なら、仕事にも影響はないと彼は言った。

Dさんはまだ独身だという。結婚という点で、全色盲は問題になるか？という質問には笑いながら「分からないよ」と答えた。Dさんの父親とR氏の父親が従兄弟関係にあたりと教えてくれた。

6. ピングラップで生まれ、ポンペイで働く人のインタビュー

Iさん (M・28歳・Fishery cooperation worker・Pingelap 生まれ・独身)

彼は2008年、19歳の時にピングラップからポンペイ島に渡った。高校は卒業しておらず、Junior High schoolまでを終えたという。ピングラップではお金の困ることもなく、何不自由なく過ごし、特段プライベートジョブをハードにするわけでもなく、時々ココナッツ採りを頼まれてはタバコを1boxもらったり、数ドルを支払ってもらう生活で、それ以外は自給自足だったという。しかし、転機が訪れる。彼は何らかの罪でピングラップの刑務所に入ることになった。罪を償うには、お金を払うか、草むしりを75日間するしかなかったという。当時、お金を持っていなかった彼は草むしりをして75日間の刑期を終えた。その頃が、彼が自分の人生を見つめ直すタイミングだったと話す。

刑期を終えてから3か月ほど経って船が来た。彼は人生を変えるタイミングだと思い立ってポンペイに旅立つことにしたそうだ。仕事を得る以外の理由としては、将来の伴侶を探したいという理由もちょっとだけあったそうだ。決して、刑期のせいでピングラップに居辛くなったとか、そういう理由ではなかったという。ピングラップが自分のHomeだし、ピングラップ以外にそう思える場所はない、とても恋しい場所だと話した。Kahlek やココナッツを採ることなど、あの地でのあらゆる出来事が恋しくはあるという。でも、帰るかどうか、未来のことはまだわからないと語った。USAは好きではないから、ポンペイ島からさらに遠くに行くつもりはないという。兄はUSAのミゾウリ州におり、弟はフィジーに在るというが、彼らからの仕送りは母親と妹のためであり、自分は自分で稼いで生きているから仕送りは必要ないということだった。

ポンペイで最初の仕事は洋服屋で洋服の荷下ろしをしたりする仕事だったそうだ。その後、日本人が経営する空港関係の会社に就職したそうだ。そして三つ目の職場が、現在働いている中国系の漁業会社である。ここはそれまでの職場と比べて給料がとても良かったそうで、今の仕事は非常に満足しているそうだ。まぐろには4種類あるそうで、収穫されたマグロの種類を仕分けしてコンテナに積むのが彼の仕事だという。ときには仕事は深夜に及ぶこともある。視覚障害は全く問題にならないという。仕分けを間違えることもないと話した。また、彼と共に働いている同僚も、「彼はFunnyなやつだよ。一緒に働いていても、他の人と一緒に働きをするし、視覚障害は問題にならない。唯一、日差しの下では、少しだけ作業がしづらそうというだけだ。」という。仕事に応募するときに視覚障害について何か聞かれたかと聞くと、「聞かれたが、面接でたくさん会話をした後、それは全く先方にとって問題ではないようだった」と彼は話した。「やりたいと思うことは何でもできるし、視覚障害は全く問題ではない、自分にとっては。」と強く主張した。この自信が、面接官たちを説得したのだろうと想像することは容易だった。

ピングラップから出てきてポンペイで働いている人は、やはり彼しかいないそうだ。その理由が何だと思うか彼にたずねると、彼も、「どうして親戚の全色盲だけが職を得ているのか、確かに不思議だ。想像することしかできないが、職を得たくても得ることができない全色盲者は、自分の障害を恥ずかしく思っていて、積極的に自己アピールできないんだと思う」と話した。親戚であるR氏が彼のロールモデルであったかについては、あまりそうは思わないとのことだった。多分、ロールモデルがなかったとしても、彼は働く道を選んでいたと思うとのことだった。自分で稼いだお金で自分の人生を築きたいというのが、彼の思いだったという。そして、「Godが男女をこの世に作った時か

ら、男性の心の中には働いて家族を養うという信条が宿っており、女性には、子供を育てて家族を守るという信条が備わっているものだ。僕は自分の中のそれに従っただけだ」と言った。差別や偏見もないと彼は話した。

彼の態度は終始、常識的で自信に満ちていた。自分の信条に対して誠実で、自分の体力や健康に自信があるというその態度は、Mさんととてもよく似ていると感じた。

彼の英語力は比較的高いと感じた。フィリピン、中国、インドネシア、ミクロネシアの人々が混ざり合って働く漁船会社において、彼の英語力は十分なのだろうと思われた。やはり、英語力の高さは、多少なり就職に影響しているような気はした。

興味深かったのは Kahlek の話である。彼がピングラップにいた頃、彼もまた常に Torch man だったという。なぜかと聞くと「たぶん全色盲だからだと思う。それに当時 19 歳で最年少だったから、自分よりもうまく Net を使える先輩がたくさんいた。Net をやりたいと申し出たこともあったけど、彼らは僕に Net の役をさせたくないみたいだった。なんでもやってみたいタイプだから、すごく憤りを感じたよ。」と彼は話した。他の全色盲の人も Torch しかやっていないという話をすると、たぶん全色盲だから、Net をもたせたくないんだと思う、と話した。過去に Net をやっていた全色盲がいたかどうかについては、分からないということだった。Torch が眩しすぎなかったかどうかという質問には「暗闇の中に Torch があるぶんには全く問題にならないよ」と話した。

7. ピングラップ島から USA に移住した人

ピングラップ島から USA に出た E さん (34 歳) は、移住して 1 年になるが、まだ職を得られていないという。その理由を聞くと、確かに E さんはピングラップでは何でもできたが、ピングラップで得たスキルが USA での職業にはなかなか応用できないという。棚に商品を並べたり、そういう仕事を一から学ばなくてはならず、難しいのだそうだ。

8. ピングラップ島から出てきてポンペイ島で無職な人

私と共にピングラップ島からポンペイ島に出てきた C さんは、滞在 1 週間でホームシックになっていた。しかし、帰りたくてもお金がないので、とりあえず職を探さなくてはならないと言っていた。職を探すのは難しいのかを尋ねると、「I will just try my best」というようなことを言っていた。しかしその口調には活気はなかった。

9. ポンペイ島のピングラップコミュニティに生まれて無職な人のインタビュー

9-1. Fさん (M・26歳・独身)

彼は Mand で生まれて Mwalok で育ったということだった。高校は中退している。その理由を聞くと、高校の授業料は無料だが、Mwalok は家から遠く、タクシーなどに乗る必要があるがそのお金がなかったということと、学校で食べ物を買うお金などがなかったのをやめてしまったという。ご両親は遠い昔に他界されたということだった。

職を見つけるのは障害もあり難しいと感じているようだ。しかし、プライベートワークで小さなお金を稼ぐこともできるからなんとかなるという。誰かを助けているから、誰かも自分を助けてくれる、それで生きてはいける、という。また、Mwalok の人々曰く、この島ではお金がなくてもジャングルに入ればローカルフードが手に入るため、お金がなくても生きていけるという。また、チキンや米を買いたければ、ローカルフードを市場に売ってお金に変えることもできるという。F さんも小さな頃からココナツの木に登ることができるそうだ。ただ、ピングラップ島の暮らしとここの暮らしが「ぜんぜん違う」ということには賛同していた。やはり、自給自足ができるといっても都市部とのつながりの中で暮らしているため、金銭が必要になる機会はピングラップ島よりも多く、また、ピングラップほどには手短なところにローカルフードがないので、ピングラップ島のようにはいかないということを行っているのではないかと思われた。(余談ではあるが、Mwalok の人々は犬を食べるようで「めちゃくちゃうまいよ！焼いて食べるんだ。お腹の中にオス・メスの赤ちゃんが入っていることがあるけど(もしくはオス・メスの生殖器のことを話していたのかもしれない)、それがまたうまい」というようなことをいっていた。R 氏の家では4匹の犬はペットだったので私が「誰かの家に飼われているペットの犬もいると思うけど、どの犬を食べるんですか？」と聞くと、通じたのかよくわからないが「どの犬もこの犬もないよ、犬なんてその辺にいっぱいいるから、それを食べるんだよ。ただ、あまり大きすぎないやつ。中ぐらいのサイズまでのやつを食べる。本当にうまいんだから。牛よりもうまい！」といていた。)

友人の全色盲者たちは、みんな USA に行ってしまったという。彼らは、Pohnpei で暮らしよりも USA での暮らしに満足していると F さんに話しているそうだが、F さんは「信じがたい」という。「僕はここを離れるつもりはないし、この島が一番にちがいない」と。

9-2. Pさん (M・64歳・既婚)

彼は小学校と高校生の子供が二人と妻がいる。かつては働いていたこともあるようだが、基本的にはローカルフードを育てて、プライベートジョブをしながら生きてきたようだった。安定した職を得るのは難しいと話した。ローカルフードがあるのでなんとか生きていくことはできるというが、「ローカルフードで十分か？」という質問には「十分ではない」と答えた。充分でないときは、親戚を訪ねてご飯を分けてもらっているということだった。ココナッツの木に登ることは今でも可能だと話した。自分に自信があるか？という質問には「答えられない(わからないという意味?)」という答えだった。ピングラップとポンペイの暮らしを比較すると、どちらがいいと思うかという質問には「ピングラップがいいと思う」と答えたが、Mandが自分の故郷であるので、生活が苦しくてもピングラップに移住するなどの考えはないという。

最後に、不安に思っていることや困っていることがあるかと尋ねると、「ない」と答えた。周囲には他に7~8人の住人がインタビューを聞いており、若い女性が通訳に入ってくれたこともあり、あまり率直に意見を言えなかった可能性もある。

9-3で出てくるSさんに話を伺ったところ、Pさんは時々Sさんの家にもご飯を分けてもらいに来るということで、その暮らしの困難さがうかがわれた。

9-3. Sさん (M・34歳・カレッジ二年生で中退後、就職経験なし・独身)

Sさんはカレッジの二年生まで進級したのち、進級試験に落ちてしまったために一般教養まででカレッジを中退している。お金を払えば大学に戻ることもできたそうだが、彼の中ではそこまでのモチベーションがなかったようだ。職についていたことがなく、アルバイトすらしたことがないそうだ。2003年にMandに戻ってきて以来、現在80歳になる父親の年金を生活費のベースとして、家族(父、妹、妹の子供、S)で分けながら暮らしているという。父親の年金は月に200~300ドルほどあるそうだ。父親の年金をベースにすれば、米を家族でシェアすることができるため、そこまで困ることはないようだった。肉が欲しければココナッツを採ったりタロを採ったり、時にはビートルナッツを採ったりして、それらを近くのストアで物々交換すれば、缶詰の肉が手に入るということだった。また、コプラは時に肉の代わりに食べているといい、バナナとコプラを食べて済ませればいいのだから、そこまで困ることもないということだった。しかし、もしも年金がない場合のことを考えると、生活はかなりハードになるだろうと語った。

彼はこれまでに沢山の差別や偏見を受けてきたという。道端で知らない人に、彼の瞬きの激しさを笑われたりしたこともあったそうだ。大学に入ってから、周りが自分を

どう見ているかということや、どう評価しているかということがとても気になって、そういったことに精神をすり減らしていることもあり、なんとなく大学での学業が続かなくなったようだ。しかし「自分に自信があるか？」という質問には「自信がある」ということだった。理由を聞くと少し答えに詰まっている様子を見せながらも、「いろんな偏見などを受けてきたが、それを跳ね除けようとしてきたことが自分の自信につながっているかも」というようなことを言っていた。

視覚障害が生きることに何か障害になっている例があるかということを知ると、熟したバナナやブレッドフルーツが見分けられないので、それらを取ろうと思うと誰かをサポーターとして連れて行くことになる。その時に、その人に何かしらのお礼を渡さなくてはならない（お金か、収穫物を折半するなど）ので、一人で行けたら自分の取り分が多くていいと思うと話した。

魚釣りには一人で行ったことがないそうだ。また、スピアフィッシングはできないので、ラインを使ったものをやるのみだそうだ。誰かがボートで釣りに行く時に付いていくくらいしか釣りの経験はないという。

彼はピンゲラップ島に一度も行ったことがないというが、ピンゲラップ島の暮らしを想像して Mand の暮らしと比較するとどちらがいいと思うか？という質問には、「絶対にピンゲラップ島だと思う」と話した。「ピンゲラップは海が近いからすぐに魚が手に入る。お金も要らないし、全色盲だけでなく普通の人にとっても暮らしやすい土地だと思う。」と話した。ただ、コロニアと比べたら断然 Mand がお金がかからなくていい、と話した。

彼には全色盲の姉がおり、今 USA にいるそうだ。姉は USA の暮らしに満足しているのかと聞くと、「家にこもっているだけで、非常に退屈しているそうだ。Mand のように、近所に知り合いもないからだと思う」ということだった。

9-4. A さん (M・57 歳・College of Micronesia を中絶・就職経験なし)

彼は COM を長いこと中絶しているが、近いうちに大学を終えたいと思っているといい、インタビューを行った 9 月 18 日の一週間前に、奨学金に応募したと語った。果たして高齢の学生に対して奨学金が与えられるのかは、彼自身も周囲も懐疑的であるようだった。彼はこれまでに何度も政府の仕事にアプライしているというが、なぜか一度も採用してもらっていないそうだ。アプライシートには全色盲について記載する欄はないとのことなので、書類で落とされているのだとしたら障害は関係していないと思われる。多分、彼は良い職ばかりを狙いすぎて就職の機会を逃し、キャリアがないまま歳をとっ

てしまったために、より就職しにくい状況に陥ってしまったと思われた。ポンペイでは自分が期待する職に就けないということを前提にして動いていく必要があると人々はいう。良い職を得たいのであれば、選り好みせずに関わり降りてきたところからステップアップしていくしかないのだと。「日本でもアメリカでも良いから、こういう貧しい人が大学に戻れるようなサポートプログラムがないのだろうか」と彼に問われた。私は D さんが Security guard をやりながら大学に入学する資金を貯めていること、彼にとっては就職は困難ではないそうだとすることを匿名の事例として A さんに紹介した。彼は私が予想していた以上に驚いた様子を見せながら、そんなやり方・生き方ができるのか、と目から鱗という表現がぴったりの表情をしていた。

彼は独身であり、自分自身が生きていくには十分なタロパッチやバナナを持っているそうだ。また、Mand では兄弟とともに暮らしているため、例えばお姉さんが輸入食品を用意した場合には、自分がローカルフードを用意して、シェアしながら助け合って生きていると話した。魚がどうしても欲しい時は、Mand から一番近い海岸に歩いて行くそうだ。2 マイルくらいだといい、早歩きすれば 50 分で海岸につけるといふ。昔は父親がカヌーの作り方を教えてくれて、それに従って作ったカヌーがあったが、5 年くらいまでに壊れてしまって、それ以降は海岸から歩いていける範囲のところでラインを使った魚釣りをするだけだそうだ。やはりカヌーやボートで海に出るほどには取れないが、しかし家族で分けて食べる分には良いのだと話した。そして、「仕事がなくともここまで生きてこれるなんて自分でも信じがたい。神様のおかげだよ」と、白髪と白いひげに包まれた顔をくしゃっとさせながら、彼は少年のように無邪気な笑顔を見せた。

彼に「自分に自信があるか、自分を誇りに思えるか」という質問をすると、「職を持ってない人間がそんなことを思う資格はないよ」とまた無邪気に笑ったが、周りで一通りの話を聞いていた家族の目を少し気にしながら謙遜しているような気もした。また、仕事がないから独身でここまで来たというようなことを言っていた。

ピングラップ島には、高校生の夏休みを利用して、たまたま干ばつが起こった 1983 年?に行ったという。1 か月くらいの滞在だったそうだが、生活はとてつと違ふと感じたそう。特に干ばつの時だったので、ピングラップには滝がないということが生活に困難をもたらしていると感じたそう。しかし、各家の持つ土地が広い点などは良いと思ったそう。ピングラップ島と Mand の暮らしを比較してどちらが良いと思ったかという質問には Mand だと答えた。何故なら、自分の土地や作物があるのは Mand だし、Mand がホームだからだといふ。

差別や偏見を経験したかという質問には、10 代の頃はよくあったと話した。笑われ

て泣いた幼少時代もあったそうだ。しかし、大学に入った頃以降は、差別的な経験はしていないという。

9-5. Tさん (M・43歳・Mwalok出身・現在は無職・独身)

Tさんは10歳から12歳まで(エレメンタリースクールの4年から7年まで)をピングラップ島で過ごしたという。それ以外の学童期は、Mwalokで育っている。ピングラップではまだ幼かったので、労働というものはしなかったというが、ピングラップで初めてココナツの木に登る経験をして、そこで転落したため、それ以降ココナツには登っていないという。ココナツの木は比較的傾いており、簡単だと思って登り始め、あと少しでココナツに手が届くところまでは登れたのだそうだが、ココナツの手前で木の裏側にぐるんと吊り下がって落ちてしまったという。Mwalokではココナツに登ったりする経験がなかったのかと聞くと、彼の世代ではすでに、子供達に対するそういった教育はなくなっていたと彼は話した。

1994年にポンペイの高校卒業後1996年まで無職の期間を経て、グアムにあるHarvest Baptist Bible Institute(現在のHaevest Baptist College)に入学したという。1999年にカレッジを卒業したのち、親戚が暮らすサイパンに移り、2002年までホテルで清掃の仕事をしていたという。2002年から2014年まではアメリカのモンタナ州に移住し、ホームレスの人を支援する機関で皿洗いなどキッチンの担当をしたり、ご飯をホームレスに配る仕事をしていたそうだ。給料は安かったそうだが、良い仕事だったと彼は言う。寝泊まりできる場所が職場にあったのが気に入っていたポイントのようだ。アメリカでは視覚障害者に対する支援がしっかりしているようで、政府が職探しや生活のサポートなど、あらゆることを支援してくれたそうだ。まず、視覚障害者には全員に白い折りたたみの杖が渡されるそうで、外出する際にはその白い杖を持って出かけるように法律で指示されていたという。実際に、ポンペイよりも交通量が多いアメリカは彼にとって非常に危険が多い場所であり、スーパーの中であっても混んでいると人とぶつかって危ないので、白い杖は非常に彼の助けになったそうだ。白い杖を持っていれば誰もが彼を視覚障害者だと認識して手助けをしてくれたという。バスに乗るときも、レストランに行く時も、スーパーに行く時も。その他、政府からは拡大鏡やサングラスも支給されたそうだ。バスに乗る方法を覚えるまでは、誰かと一緒に出かけなくてはならなかったそうだが、政府の人がバスの乗り方を教えてくれてからは、白い杖さえ持っていれば容易に移動できるようになり、人の助けは要らなくなったそうだ。

2014年にポンペイ島に帰ってきてから、彼は3年間無職だという。全色盲であるが

故に就職が難しいと彼は言う。彼の弟である D さんが Mwalok のスーパーで Security guard をしており、D さんは職を得ることは簡単だという意見だったため、私はそのことを Tiny さんに聞いてみると、「あのスーパーはピングラップ人の知人が経営しているお店だし、自分たちのコミュニティーにある。それに、歩いて行ける距離だからタクシー代もかからないし、たまたま条件が揃ったところだよ」という。知人が経営しているところなどに運良く雇われることができればいいが、そうでなければ難しいという感覚があるらしい。

ピングラップとポンペイとアメリカの暮らしを比較するとどこが一番いいかというところ、彼は最初アメリカ、と答えた後、やっぱりポンペイかなあと言った。理由は生活が楽だからだそうだ。アメリカは交通量が多いが、ポンペイは交通量も少ないし、タクシーを呼べば Door to door で行きたい場所に行ける。白い杖も要らないくらい道は空いている。アメリカのいいところを一つ挙げるとすれば、「人々がみんなが助けてくれるところ」だと語った。ピングラップ島を選ばない理由は、彼にとっては生活がハードだからだそうだ。彼の中では、「全色盲者はお金がないと生きられない」という認識があるという。ココナッツを自分で取ることもできないし、ボートを運転した経験もない。食べ物はお金で買うしかないと思っているそうだ。私はピングラップの男性たちがノーマルな人と同じようになんでも出来たという話をすると、「君が言うように、彼らはそうしなければ生きていけないから、小さい時から相当な努力をしてその環境に順応したんだと思う。もし僕が同じようにピングラップで育っていれば、僕もきっと同じようにできたと思う。彼らは自分に自信があるのではなくて、単純にその環境に順応しただけではないかなあ。僕はポンペイで生まれ育ってしまったから仕方ないよなあ。」と話した。彼に、ノーマルな人と同じようにできないこと、視覚障害がなければやってみたかった夢を聞いてみると“車の運転、バイクの運転、ミリタリーへの入隊、建設現場で働くこと”などが例として上がった。特に、家の建築とミリタリーには興味があるということだった。

自分自身に自信があるかどうかを聞くと、彼はあると答えた。最初にアメリカに行く時はとても不安で自信がなかったそうだが、アメリカで一人暮らしをできたことで自信がついたという。彼は現在、アメリカで一定期間働いたことで、その就労期間分の社会保障が受けられる制度があるらしく、アメリカから送金があるという。そのお金で日々の暮らしをすることができるらしい。しかし、働かないで座っているだけでお金が入るといのは精神的に気持ちがいいものではないといい、できれば職を得たいと語った。

自分の vision が好きかどうかという質問には、少し慎重に考えた後「No」と答えた。

10. USA に出て行ったピングラップの人の暮らし

アメリカのミズウリ州ではピングラップのコミュニティが存在するらしい。ここに暮らす人たちは、ミクロネシアの暮らしにうんざりして出て行ったにもかかわらず、ピングラップのコミュニティを作って「まるで Mand と同じような暮らしをしているらしいから、矛盾していておかしいでしょう？」と R 氏の妹は笑っていた。

R 氏の二人の姉は、ジョージア州に暮らしているようで、その地域にはピングラップ人はほとんどいないということだった。

11. 一般の人に聞いてみた

ピングラップ島で13歳くらいまで育った現在23歳の男性と、Mandで育ち、現在COM (college of micronesia) でテレコミュニケーションの学位を取ろうとしている男性に話を聞くことができた。彼らが知っている全色盲の理由にまつわる伝説を教えてくれた。どうやら一部のピングラップの人の中では、ピングラップ島とMandの全色盲は異なる由来ということになっているらしい。ピングラップ島の由来はこうである。ある宣教師がピングラップ島にやってきた。宣教師はピングラップ島の男性が二人の女性を妻にしているのを見て、その制度を変えようとした。それに反発した人が、宣教師の目玉をくり抜いて（もしくは目玉の中に何かを挿入して）、彼を縄で縛って海に沈めた。それを知った他の宣教師が、「宣教師を海に沈めた人間はこれから代々全色盲になる」という予言をした。それ以降、ピングラップ島には全色盲が発症することになってしまった、というはなしである。一方のMandでは、全色盲は白斑症の一部が目の症状として出てしまっていると思われているらしい。

また、彼らにピングラップの全色盲の人はポンペイの全色盲の人よりも自信があるように見えたという話をすると、彼らはその仮説は事実かもしれないといった。ピングラップ島ではお金がいらなし、家族を養おうと思えば島にある食物でどうにかなる。海も近い。しかし、ポンペイでは仕事がなければ家族を養うことはできない。もちろん、どのレベルで満足するかは人によって異なるから、最低限のタロイモとバナナで満足できる人もいるだろう。しかし、肉が食べたかったり、毎日の食事を喜ばしいものにするためには、やはりお金を稼いで食物を得るしかないのではないか、という意見だった。

また、R 氏の弟で Mand に住む彼は、ベルギー人の全色盲の人が昔この島に来て、ベルギーにも全色盲がいるという話をしたそうだ。だから、多分最初の遺伝子は白人によ

ってピングラップ島のコミュニティにもたらされて、それが近親婚により遺伝子の頻度が上がって今に至っているのではないかと話した。ピングラップだけでなくベルギーにも全色盲の人がいるということが不思議だと話した。どうやら、この島の人たちの、比較的多くの人が、他の国にも全色盲がいるということを知らず、全色盲はピングラップの人だけの病気だと思っているようだ。

私は、このベルギー人と言われているのは、オリバー・サックスと一緒にこの島にやってきた、ノルウェー出身のクヌートのことではないかと思っている。サックスが手記に書いているように、クヌートが来たことで島の伝説は変わり、彼が滞在している間にすでに、全色盲が白人の血によってもたらされたものだという伝説に変わってしまったことにクヌート自身も驚いていた、と記述している。

この島の全色盲の伝説は、もはやいろんなストーリーが混ざり合い、オリジナルとはかけ離れたものになりかけていた。

IV. ピングラップ島、ポンペイ島の全色盲について総括

まず、ピングラップ島とポンペイ島の暮らしには大きな違いがあることを理解しておく必要がある。ピングラップ島はピングラップ人だけが住んでいる小さな島である。一方で、ポンペイ島は FSM の各州の離島や他国から来た人が混在して暮らしている。(ただし、Mand と Mwalok はピングラップ人のコミュニティなので、自然環境や立地は違えども、ピングラップ島の独自のコミュニティとなっている。) ポンペイ島で暮らす他の島出身者の言語は異なるので、ピングラップのコミュニティを出た時には、英語を使わなければコミュニケーションが計れないことも多い。

また、ポンペイ人の中には、ピングラップ人に偏見や差別意識を持つ人もいる。差別が激しかった頃、ポンペイ人はピングラップ人のことを「huge feces」(ピングラップとポンペイを結びつける伝説に基づいた差別用語) などという表現で呼んでいたようだ。1980 年代以降、FSM が USA と Free association を結び始めた頃から、FSM は一致団結の兆しとなり、そういった差別もかなり少なくなった。しかし今でもごく一部の人は、差別的なまなざしを向けるという。その事実は、Shem さんへのインタビューを参照していただきたい。また、FSM 政府で働く R 氏ですら、未だにそういう人に遭遇するそうだ。そのときにこちらが怯んでしまうと、それ以降、見下され続けることになるという。ポンペイ島に生まれ、ポンペイ人と同じ土地を故郷にしながらも、ポンペイ生まれのピングラップ人の立場はポンペイ人よりもときに脆弱である。

また、ピングラップ島と違い、ポンペイ島は貨幣経済であるので、お金のもつ意味は

ピングラップよりも大きい。さらに、この島では大学を卒業した健常者でも就職が難しい経済状況である。大学を卒業後、4年間職が見つからず、結局、最低賃金の仕事を得ることしかできなかった人もいる。この状況は、全色盲などの障害を持っていればなおさら厳しい状況に置かれることになるのは想像に難くない。

また、ポンペイ島にはピングラップ人のコミュニティがあるといえども、そのコミュニティ内でのライフスタイルはピングラップ島とポンペイで大きく異なる。

ピングラップ島ではセクション制度が機能しており、チームワークを行う機会が非常に多い。カヌーを作ったり、漁に出る時も何人かが一緒にボートに乗り込んで作業をする場合も多い。一人きりで行う仕事というのは極めて少ない。また、島のほとんどすべての人が教会に集まる。毎朝行くことはできなくても、日曜日の礼拝にはほとんど全員が顔を出していると言ってもいいだろう。

一方で、Mand では400人いる人口のうち、多い時でも教会に来るのは40人だという。朝は2～5人だそうだ。また、ピングラップと違い、宗派が細かく分散しているために、一堂に会するとなかなかないのだそうだ。そういった地域の連携があるかないかというところも注目に値する。

そういう背景を加味して、これまで記述してきた全色盲者に対する筆者のインタビューをピングラップ島とポンペイ島の対比の視点から吟味してみると、ピングラップで生まれ育った全色盲者のうち、特に男性は、自分に自信があるという傾向が浮かび上がってくる。

その理由については以下の2点が考えられる。まず、彼らはポンペイにあるようなピングラップ人差別や全色盲差別に晒されることなく中学生時代までを過ごしていること。もうひとつは、ピングラップ島では、全色盲男性は他の男性と同じようになんでも出来るという自己イメージを持っていることである。実際に、ピングラップ島からポンペイ島に出てきて唯一定職を得て働いているIさんは、自分がなんでも出来るということを私に説明するとき「ピングラップにいた時、僕はココナッツにだって登ったし、魚釣りだってできたし、豚の世話だってなんだってできた。」と、ピングラップでの生活が自信に繋がっていることを示唆するような説明を行った。また、ピングラップに住む全色盲の男性に、「やりたくてもできないこと、困っていることはあるか」と聞くと、「できないことなど何もない。昼間に眩しくてサングラスがないと仕事しづらいという事くらいだ。あとは、強いていうなら、素潜り漁 (spire fishing) ができないくらいだ」という回答も得られた。

しかし、ポンペイ島の Mand などに暮らす全色盲の中年層以上の男性に聞くと、ノーマルの人のようにはできないことは山のようにある、という回答が多々返ってくる。運転ができない、バイクに乗れない、家を建てる仕事に就けない、黒板をノートに書き移せない、バナナやブレッドフルーツの採りごろがわからない、職が得られない等々……。多分、ピングラップ島に住む男性も潜在的には同じような問題を抱えているのだが、自給自足の生活においてはそれが問題として顕在化することは少ない。それゆえ、ハンディが意識化されることも多くない。ハンディが意識化しているかしていないかは彼らの自信の形成や就労状況において常に大きな差となってあらわれていた。

ポンペイ島の Mand にフォーカスして考えてみたい。

Mand ではピングラップほど豊かな自給自足生活は成り立たない。そんな中で、Mand に暮らす無職の全色盲の男性の生活はこうである。男性は豚の飼育をしたり、タロを育てたりしているが、ピングラップのように、それを毎日の十分な食糧にできるほどの量は収穫できず、それらはあくまでも「特別な機会もしくは必要最低限」のためのものである。また、魚を気軽に釣りに行ける環境ではないので、肉類はお金を出して購入するしかない。釣りを試みたとしても、最低でも徒歩で一時間は歩く必要がある。若ければまだいいが、年をとると大変である。また、Mand は山の方にあるため、漁の場所を選ぶのだとしたら誰かに海まで車を出してもらう必要がある。車を出した人には 10 ドルを支払うか、魚を 10 匹渡さなくてはならない。それは簡単なことではない。さらにポンペイの島の周辺は、糸釣りではあまり魚が釣れないので、魚をたくさん獲りたければ、ボートを持つか素潜り漁 (spire fishing) をするしかない。しかし、spire fishing は全色盲者が最も苦手とするタイプの漁である (私がインタビューした人の中で出来ると答えた全色盲者はゼロだった)。以上のように、Mand 社会は、ピングラップと比べると水産資源へのアクセスが難しいのである。

さらに、Mand 社会では全色盲者が職を得るためには強い自信や精神力を持っていることが必要となる。Mand 社会では全色盲者が職を得ることは正常色覚の人よりも難しい。昨今はアメリカが資本を出しているビジネスも参入しているが、そういったところでは障害者を雇いたがらない傾向もあるようだ。そういった状況の中で、デイスアドバンテージを上回るパフォーマンスを発揮できるということを全色盲者は証明しなくてはならない。

しかし自信や気力を形成する因子は、その人がおかれた環境 (社会、家族、教育) の影響を大きく受ける。Mand 社会の年配者にとって成功 (それは個々に違いうだろうが、障害のない人の生活水準以上を得ることと仮定) を強くイメージすることは難しい。な

ぜならば、以下に述べるように、彼らは差別的な時代に生まれ育ってきたからだ。

ポンペイ島を調査して見えてきたもうひとつのことは、ポンペイ島には障害に対する意識に世代差が存在することである。若い世代は比較的障害者差別や偏見に遭遇しておらず、かつ特に男性においては、障害に引け目を感じる人が少ないということである。これは先ほども述べたように、ピングラップ人自体への偏見がなくなっている時代であることと R 氏による視覚障害児童への教育環境の改善の取り組みによるものと考えられる。

しかし一方で、年配層の全色盲者は、ピングラップ人への差別の時代と障害差別を同時に経験しているため、自分の障害を“恥ずかしい”と思っている可能性も高く、それも影響して就労に至っていないことも考えられた（就労経験のある全色盲者は、就労経験のない全色盲者をそのように分析していた）。このような理由のせいか、ポンペイ島ではごく一部の、先代に就労経験を持った家系でしか、就労していなかった。

現在 20~30 代で全色盲でありながらも政府の職を得た経験のある男性 3 人のうち 2 人はピングラップ島で育っており、かつその二人とも R 氏とは血縁ではなかった。また、この二人のピングラップ出身者は、ピングラップから出てきた全色盲者の中で初めて政府に雇われた二人であり、同時に初めてクビになった二人ということにもなる。政府に就職した後にクビになった理由は怠け癖と窃盗であり、窃盗に関しては、障害者ならば窃盗なんていう発想にならないはずだとポンペイの全色盲者が言うほどである。つまり、彼はそれほどに、自分が障害者であることを意識していない、周りの目を気にしていないとも言えるのではないだろうか。

ピングラップ島で育った男性は、他の男性たちと同じようになんでもできるので、いい意味で自信家が多くなる傾向があるのではないかという筆者の仮説についてインタビューしたところ、R 氏も、一部の正常色覚の男性も否定しなかった。

まとめてみよう。ピングラップ島という環境は、全色盲の男性に自信を形成し、それはポンペイでの就労も可能にする。一方で、ポンペイ島の全色盲の人にとっては、身近に就労に成功したロールモデルが必要であり、それがあつた場合にのみ晴眼者以上の生活水準を得ることができることが多いと考えられた。

また、アメリカで暮らした全色盲者とポンペイ島の全色盲者を比較することにより全色盲者が暮らしやすいと考える社会は、「全くのシンプルな生活（自給自足）を営む社会」もしくは「障害者支援の確立した社会」のどちらかであることがわかった。つまり、ポンペイ島は全くのシンプルな生活を営むには都会化しすぎており、一方で視覚障害者支援を受けるには社会保障が足りていない社会であった。

これまでの結果と、日本人全色盲者へのインタビューを踏まえて日本社会の全色盲者の現状を見直すならば、現在の日本が目指すべき現実的な目標は、アメリカと同様に、視覚障害者の自立支援がより確立した社会の構築を目指し、道路・交通における配慮を改善し、かつ、ピングラップ島のような視覚障害者のためのバリアフリーデザインを社会の中に取り入れていくことであるように思えた。

ピングラップ島の事例からの学びを日本において応用するとすれば、それは地域・コミュニティのつながりの中で、全色盲の児童の自己肯定感を高め、社会的な困難に打ち勝てる精神力を培っていくことと言ってよいだろう。具体的には公立学校における弱視児童支援を促進し、健常な色覚の児童と同じ環境で快適に授業をうけられる機会を増やすこと。全色盲者のいる地域・コミュニティ内での全色盲者の視覚的特性を理解してもらえるよう工夫した上で、健常な子供と同じように遊びや学習の機会を与えることである。

また、日本における全色盲者の頻度は圧倒的に少なく、全色盲者の多くは独自のコミュニティを持たずに全盲や弱視の方と同じ視覚障害者団体で情報交換を行っている現状がある。こうした現状は、全色盲者が「マイノリティの中のさらなるマイノリティ」であることを顕著に示している。実際、今回インタビューを行った全色盲者も、「全盲の人に比べれば見える方だから、「見える人」として扱われてしまう。かといって弱視の集団に混じれば、色が見えないということや、羞明があるという特徴などに違いが生じる。」といい、自分の実際の状況を共有する人はいないのだと話した。彼の場合は、全色盲者のコミュニティがないことで特段困っている様子はなく、生活に何か致命的なことが起きている様子もなかった。しかし、今回、眼科医へのインタビューを通して、弱視児童の中に全色盲児童が埋もれており、正しく診断を受けられていない可能性が明るみになったことから、全色盲の認知度が上がれば、弱視児童の中の全色盲児童の発見を行うことに繋がり、より適切な支援や、全色盲児童同士の情報交換の機会につなげていける可能性も考えられた。また、インタビューを受けてくれた全色盲者も、大学に入るまでは自分の特徴的な視覚障害が何であるのか分からず、大学で初めて「全色盲」という診断を受けて「腑に落ちた」と話したため、こういった状況が未だに続いていることは大いに考えられる。

今後の展開として、これらの弱視児童の中に埋もれてしまった全色盲児童に正しい診断を行い、また、正しい診断を受けてきた児童と受けてこなかった児童に、社会支援や自信形成、就労の選択肢などにおける差が生じていないかを比較検討し、問題があれば是正していくことは、意味のあることではないかと考える。

もともと私の中には、(i)今の日本が向かっている視覚障害者支援の方向性は果たして正しいのだろうかという問いと、(ii)もっと視覚障害者と健常者がフラットになる根源的な方法があるとすれば、それは「障害をない」もののように扱い、それが成立する社会を実現することではないだろうかという問いがあった。

本研究を通してこれら2つの問いに対して以下のような答えが得られた。

(i)の問いについては、日本社会の向かっている、「障害者保障を強化していこうとする方向性」は間違っていないと結論づけることができた。

(ii)の問いについては、近代化の進んだ社会(車や電車などの交通量が多い地域)に住む障害者にとって「障害を理解してもらおう」ことは生きていく上で非常に重要であることがわかった。また、そういった環境に暮らす障害者は、「障害がある」ということを理解して支援してほしいと思っているケースも多かった。つまり「障害をない」ものとして扱うシステムよりも、「障害をあるもの」としながらも、障害者が健常者と同じ権利を持つことができる社会こそが、障害者の望む社会であることがわかった。

もはやピンゲラップ島のように自然の中で自給自足生活をするのが容易ではない日本において残されている障害者支援の道は、アメリカと同様に確固とした社会保障を築いていくこと、その一択しかないことを強く意識した。それはどこか寂しくもあり、しかし明白な現実としてある。だが、もっと個々人の心のレベルで見れば、ピンゲラップの自給自足とそこで成立していたバリアフリーを、心の中に取り入れていく歩んでいく道が、果てしなく残されているようにも思える。

V. 参考文献

●邦文

小林一弘(2017).『視力0.06の世界』.ジヤース教育新社

小西潤子(2008).『ミクロネシア、小笠原、沖縄の民俗芸能交流とその受容、変化の動態に関する比較研究:脱日本植民地下での民族芸能のローカル化に焦点をあてて』科学研究費 基礎研究B 報告書

在ミクロネシア日本国大使館(2013).『ミクロネシア連邦概況 2013年4月現在』.在ミクロネシア日本国大使館, 33p.

サックス・オリバー(1999).『色のない島へ』.大庭紀雄監修、春日井晶子(訳)早川書房, 368p.

シャランスキー・ユードイット(2016).『奇妙な孤島の物語 私が行ったことのない、生涯行くこともないだろう 50の島』.鈴木仁子(訳),河出書房新社, 144p.

須藤健一(2014). 「クロネシアにおける海面保有と資源保護の様式」『国立民族学博物館研究報告』 39巻2号 pp.175-235

谷内孝行(2001). 「色覚「異常者」をめぐる2つの視点--「全色盲者」へのヒアリング調査から」『白山社会学研究』 9 pp.89-100

山本学(1986). 『ピングラップ島-全色盲のルーツをもとめて』 .JDC, 207p.

●英文

Brody, Jacob A *et al.* (1970). Hereditary blindness among Pingelapese people of Eastern Caroline Islands. *The Lancet*, Jun 13:1(7659), pp.1253-1257

Cook, Ben *et al* (2010). *Federated state of Micronesia and Palau other places travel guide*. Other Places Publishing

Damas, David (1994). *Bountiful Island: a study of land tenure on a Micronesian atoll*. Wilfrid Laurier University Press, 272p.

Futterman, Frances (1998). *Understanding And Coping With Achromatopsia*. A Publication for The Achromatopsia Network

Hurd, Jane Newcomb(1977). *A History and some traditions of Pingelape, an atoll in the eastern caroline island*. thesis (M.A.) Pacific Islands Studies--University of Hawaii at Manoa

Journal of Micronesian Fishing staff (2013). Kahlek Fishing with fire. *Journal of Micronesian Fishing* Issue VII. pp.13-14

Sheffield, Val C(2000). The vision of Typhoon Lengkieki. *Nature Medicine* 6, pp.746-747

Simon, G J Ben *et al.* (2004) .Pingelapese achromatopsia: correlation between paradoxical pupillary response and clinical features. *Br J Ophthalmol* 88, pp.223-225

●web 記事

BBC Magazine(2015), The island of color blindness. <http://www.bbc.com/news/magazine-34346428> (accessed 2017-10-30)

VI. 後記

一通りの取材を終えて我に帰ると、元々の目的だった、彼らの美意識などについては

ほとんど深く触れられていなかったことに気づく。しかし、正直に言うと、ビジョンが白黒のコントラストであることで彼らの生活や発言、行動、身にまとうもの等に何か違いがあったかというとなかった。そして、彼らの家族に聞いても、彼らの視覚によってもたらされた神秘的なエピソードはなかった。

このことを考えていくと、色というのはなんだろうという気持ちになってくる。私たちの生活で色は生存に必須のものではないということだろうか。おそらくそうだろう。生存に必須ならば、全色盲の人々の生存はとっくに破綻しているのだから。しかし、全色盲の人たちの多くが音楽を愛していたことは興味深い。色が私たちに世界の彩りを与えてくれるのだとしたら、全色盲の人たちにとっては、音楽がそれにあたるのかもしれない。また、彼らは正常な色覚の人以上に、「光とともに生きている」人々である。日本人の全色盲者も、木漏れ日が好きだと言っていた。私は彼らの視覚を知ろうと努力する中で、島の地面に落ちている沢山の光の重量感に気づき、光が生まれた遠く空の向こうの星々の世界を、昼間に意識したのはほとんど初めてだった。光というものが当たり前すぎて、私はほとんど「光の存在」を忘れていた。彼らには、色がなくても「光」があった。光は彼らの視力を蝕み、そして同時に、“世界”を与える。

ピングラップ島の深い夜の闇の事も忘れてはならない。日本の全色盲者は星が見えないと語った。しかしピングラップ島の全色盲者は、夜の星はよく見えると語った。日本では空があまりにも明るく、その中のかすかな星の輝きを見ることは、視力の悪い全色盲者には難しい。しかし、ピングラップ島の深い夜の空に浮かぶ星は非常に明るく、それは全色盲者にとっての Dark star なのだとということを知った。

彼らの好きな夜がピングラップ島にはあって、彼らの好きな夜釣りがピングラップ島にはあった。それは、全色盲の人のために作られたものではないかもしれないが、でもまるで彼らの生を満たすために、彼らにも喜びがもたらされるように、そうあるように見えた。そして自然もまた、人間のために自己表現を変えるということもなく、黄色くなったり緑になったりしながら、あるがままの存在でそこに溢れていた。島を外海のボートの上から眺めた時、ココナツの木々や植物が、島の大地から海に向かって歩き出しそうな勢いで、海に、空に伸びていた。その生命力が、丸みと厚みを帯びた島の輪郭を作り出していた。その島の反対側には、どこまでも広い海の静寂と恐怖があり、その上を、群れを成さない鳥がそれぞれに、大きな距離をおいて飛んでいた。これから夜になろうとする赤い夕日と金色の光を背景に、たっいま島を離れて、巨大な海の上を飛行することに決めた鳥を勇敢だと思った。次に休むことができる島は遠く果てしなく、命ある間に果たして次の島にたどり着けるのだろうか。しかしすぐあとで、彼は海鳥だ

からきっと海に浮かんで休むことができるのだと気づいた。彼にとって海に出ることは、私が海に出ることと、きっと全然ちがう意味合いなのだ。しかし、彼はどこまでもどこまでも海よりずっと高い高度を維持して飛んで行った。次の島まで、決して休むつもりなどないとでもいうように。